

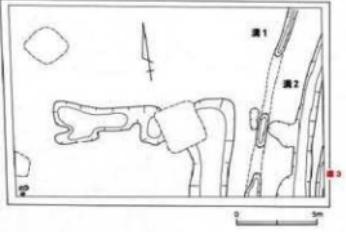
# 総社市埋蔵文化財調査年報 2

(平成 3 年度)

1993年3月

総社市教育委員会

総社市埋蔵文化財調査年報2(平成3年度) 正誤表

ページ	位 置	訂正前	訂正後
2	第1図	5 km	2 km
4	第2図	5 km	2 km
7	第4図	「文字の欠落」	溝3
			
			第4図 調査区平面図 (S=1/200)
35	第24図	土壤-6	土壤-2
35	第24図	土壤-7	土壤-3
46	第39図	H-4 平断面図	H-1 平断面図
59	第66図	5 m	6 m

# 序

総社市には、作山古墳やこうもり塚古墳、備中国府跡や備中国分僧・尼寺跡などをはじめとして、数多くの埋蔵文化財が残されています。しかもその密集度は県下有数の地であるといわれています。このことは総社市が古代において、吉備あるいは備中國の中心として大いに栄えていたことをしめすものでしょう。

これら先人の残した足跡により、総社市独自の歴史的風土がはぐくまれており、それらを後世にむすんでいくのがわれわれの責務となります。総社市は「古代と21世紀をむすぶ風格ある文化創造都市」を将来像としており、こうしたことから埋蔵文化財の保存・活用が進められていかなければなりません。

しかし、近年の開発ラッシュによって埋蔵文化財の調査は大規模かつ長期的となってしまっており、記録保存となった遺跡の証しである報告書の刊行はなかなか進まないという現状にあります。そこで昨年度より、調査の成果を少しでも早く多くの方々に公開することを主目的として『総社市埋蔵文化財調査年報』を刊行しており、今回がその2集目となります。

この小冊子がそうした目的を少しでも果たすことができれば幸いです。

平成5年3月

総社市教育委員会  
教育長 浅沼 力

## 例　　言

1. 本書は、総社市教育委員会が平成3年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査および確認・立会調査について、その概要もしくは報告をまとめたものである。
2. 本書の作成は、各調査概要を各調査担当者が分担・執筆し、それを編集したもので、それぞれ文末に担当者を記し、文責とする。執筆は文化係職員、谷山雅彦・高田明人・武田恭彰・前角和夫・高橋進一が行い、編集は執筆者の原稿のままでし、用語などについても統一していない。
3. 本書で使用した方位には、真北と磁北とがあり、真北にのみTNの記号を付ける。高さについては明記しないかぎり東京湾の平均海面を基準とする。
4. 出土遺物や写真・図面等については、総社市教育委員会服部収蔵庫にて保管している。

## 目 次

### 序 文

### 例 言

1. 総社市埋蔵文化財行政の概要 .....	1
2. 確認および発掘調査概要	
高本1・6号墳の発掘調査概要 .....	5
悠堂遺跡 .....	7
石原後遺跡 .....	10
新消防庁舎建設に伴う埋蔵文化財確認調査 .....	12
シルバーワークプラザ建設に伴う埋蔵文化財確認調査 .....	16
朽寺廃寺跡史跡整備に伴う確認調査 .....	18
備中国分寺防火水槽建設に伴う確認調査 .....	22
平成3年度は場整備事業に伴う調査の概要 .....	24
3. 発掘調査報告	
三須・畠田遺跡 .....	27

## 図 目 次

第1図 確認・立会調査位置図1 (S=1/40,000) .....	2	第8図 確認調査位置図 (S=1/5,000) .....	12
第2図 確認・立会調査位置図2 (S=1/40,000) .....	4	第9図 トレンチ配置図 (S=1/2,500) .....	13
第3図 発掘調査位置図 (S=1/50,000) .....	26	第10図 トレンチ断面図 (S=1/60) .....	13
悠堂遺跡		第11図 出土遺物 .....	14
第4図 調査区平面図 (S=1/200) .....	7	シルバーワークプラザ建設に伴う埋蔵文化財確認調査	
第5図 出土遺物 (1~3包含層、4~6清3) .....	8	第12図 トレンチ配置図 (S=1/2,500) .....	16
石原後遺跡		第13図 出土遺物 .....	
第6図 位置図 (S=1/5,000) .....	10	第14図 確認調査位置図 (S=1/5,000) .....	18
第7図 造構配置図 (S=1/200) .....	10	第15図 トレンチ配置図 (S=1/600) .....	19
新消防庁舎建設に伴う埋蔵文化財確認調査		第16図 東地覆石列 (S=1/40) .....	20
		第17図 塔心跡 (S=1/60) .....	20
		第18図 出土遺物 .....	21

備中國分寺防火水槽建設に伴う確認調査	第21図 調査区平面図 ( $S=1/200$ )	23	
第19図 調査地位置図 ( $S=1/2,500$ )	22	三須・畠田遺跡	
第20図 北南壁土層断面図 ( $S=1/80$ )	23	第22~74図 三須・畠田遺跡探査図	30

## 表 目 次

第1表 確認・立会調査一覧表	3	宿寺廃寺跡史跡整備に伴う発掘調査概要	
第2表 平成3年度発掘調査一覧表	26	第3表 岡山県内古代寺院塔心礎一覧表	21

## 図 版 目 次

高本1・6号墳の発掘調査概要	第10図版 T-9 土層断面	15	
第1図版 高本1号墳主体部	6	宿寺廃寺跡史跡整備に伴う確認調査	
第2図版 高本遺跡土壙墓群	6	第11図版 地覆石北東部分（北から）	21
慈堂遺跡		備中國分寺防火水槽建設に伴う確認調査	
第3図版 調査区全景（北東から）	9	第12図版 溝、布目瓦（北から）	23
第4図版 造構検出状況（南東から）	9	第13図版 溝土層断面（南から）	23
石原後遺跡		平成3年度ほ塔整備事業に伴う調査の概要	
第5図版 調査区全景（南から）	11	第14図版 1区全景（南から）	25
新消防庁舎建設に伴う埋蔵文化財確認調査		第15図版 2区建物群（東から）	25
第6図版 調査地全景（西方より）	15	第16図版 3区全景（東から）	25
第7図版 T-1 土層断面	15	三須・畠田遺跡	
第8図版 T-4 土層断面	15	第17~23図版 三須・畠田遺跡図版	65
第9図版 T-8 土層断面	15		

## 1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

総社市における埋蔵文化財行政は、教育委員会社会教育課文化係が担当している。係では、ほかに各種文化財の保護事業や文化・芸術の振興事業などの文化行政を行うが、ここでは埋蔵文化財について、これまでの状況と平成3年度事業についてまとめておくこととする。

総社市においては、これまで開発面積1,000m<sup>2</sup>以上の場合の開発・建築申請については文化係へ合議となっている。しかし昭和63年以降、1,000m<sup>2</sup>以下の場合でも真壁遺跡など周知遺跡内における鉄筋建物等については合議としている。しかしながら、周知の遺跡の分布範囲がはっきりしていないことや、申請段階では必ずしも遺跡の保護を前提としたものでないことから、開発と遺跡保存との調整は申請後となり、充分な対応を行なうことができない。さらには、個人住宅に関しての建築申請についてはほとんど未審査である。ただし、真壁遺跡をはじめとして都市計画区域内においてはすでに下水道の埋設がほぼ完了していることや、かなりの盛土を行うことから、開発に伴って地下を掘削するような工事は個人住宅において行われるのが通常のケースである。しかし、都市計画区域外については下水道がなく、合併浄化槽の普及により規模の大きな掘削が個人住宅においても行われるケースが多い。しかも総社平野内の遺跡では耕土直下が遺構面となるものもあり、その場合の遺跡破壊はかなり進んでいると推定される。早急な対策が必要である。また、総社市においては詳細な遺跡分布調査が実施されておらず、遺跡の保護対策の上での事前審査、あるいは開発に伴う遺跡保存の調整についても後手にまわることが多い。公共事業に限ってはその事業実施にあたって、前年度末に次年度の事業計画に関する調査・ヒアリングを実施しており、それら事業と埋蔵文化財の対応については遗漏のないように心掛けている。

このような状況のなか、平成3年度の発掘調査は、12遺跡、総調査期間21ヶ月となる。これに事前審査で確認調査を実施したもの10ヶ所が加わる。しかも完全に体制の整えられた事前審査でないことや確認でなく立会対応となったものなどもあり、その実数はもっと増える。事実、工事中において緊急に行った確認・立会調査は後を絶たない。

平成3年度に実施した立会・確認調査については第1表にまとめている。最近の状況としては、岡山県立大学の平成5年度春開学にあわせ、大学生を対象とした共同住宅が数多く建設されており、また、市の発展に伴って真壁遺跡を中心とする商業施設に大型店舗等が続々と出店されている。とくにこれら建築建物の傾向として、地盤改良工事が行われるもののが昨今急増している。この工事は、これまでの基礎部分のみの掘削に比べ、格段に地下の掘削量が増加しており、しかも地盤の入替でなく、硬化剤攪拌によるものであることから工事立会で対応することも困難である。今後の対策としては、すでに一部で行っている確認調査をその開発面積に応じて実施できるよう、遺跡保護の啓蒙を進めていかなければならないものである。(前角和夫)



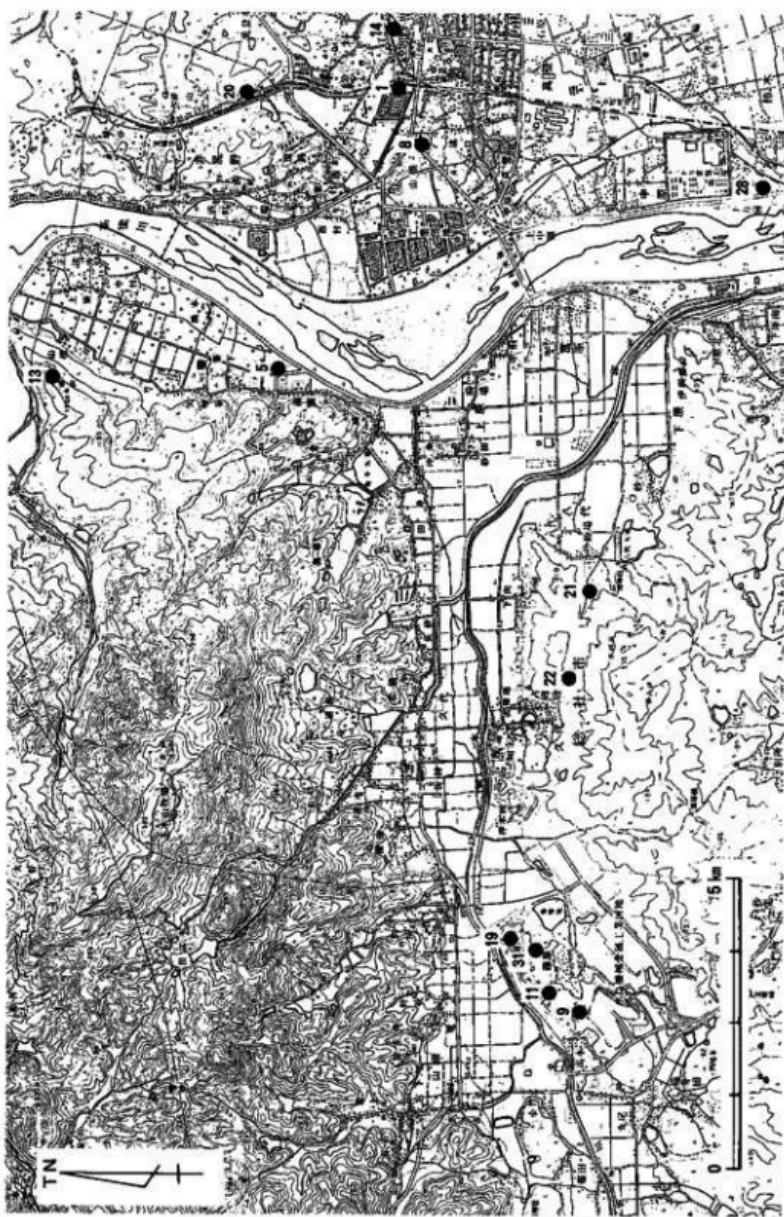
第1図 確認・立会調査位置図1 (S=1/40,000)

第1表 確認・立会調査一覧表

番号	所在地	調査契機	調査年月日	種別	調査所見	遺物・通構	遺跡
1	門田367-1外	民・住宅団地造成	H 3. 4. 10	確認	古代後期以降の耕作地か	○・○	○
2	井手1103-1外	民・商業店舗建設	4.10	確認	近世以降の耕作地か	×・○	△
3	小寺371-1外	公・消防庁舎建設	4.15~30	確認	別紙報告参照		
4	三輪1348	公・観光施設建設	4.15	立会	包含層(古代)	○・×	△
5	秦1064-1外	公・下水道施設	5.13	確認	別紙報告参照		
6	浦口587	公・公園施設事業	6.11	確認	別紙報告参照		
7	中央1-2-109	民・駐車場造成	6.19	立会	包含層(古代～中世)	○・?	○
8	浦口123-1	民・共同住宅建設	7.29	立会	床土下は砂層(微高地か)	×・×	×
9	久代2348外	民・採土掘削	8.5・6	確認	H 3年10月より発掘調査		
10	井手565外	公・学校校舎増築	8.12	確認	H 4年4月より発掘調査		
11	山田3159-1	分布調査	9.6	分布	伐採範囲内に古墳あり	---	古墳
12	真壁67外	民・商店店舗建設	9.17	立会	真壁遺跡地内	---	○
13	秦	民・道路敷設	10.14	立会	道路により城郭の一部破壊	○・○	城跡
14	門田415外	民・区画整理事業	10.22	立会	住居跡か?	○・○	○
15	上林1046	民・防災施設工事	11.11	確認	別紙報告参照		
16	鶴社支線3373号道	公・下水道敷設	12.3	立会	旧耕土下は礫層	×・×	×
17	小寺669-1	公・道路補強工事	12.16	立会	包含層か?	×・×	△
18	三須1059-1外	公・道路拡幅工事	12.26	緊急	別紙報告参照		
19	久代2591-1外	民・採土掘削	H 4.1.10	緊急	遺構・遺物なし	×・×	×
20	井尻野1849-4	公・災害復旧工事	1.22	緊急	遺構・遺物なし	×・×	×
21	八代348	民・農地開墾	1.27	立会	弥生後期～古墳の集落	○・-	○
22	久代・八代	民・電柱敷設	1.27外	立会	遺跡推定地は計画より外す	×・-	古墳
23	上林386	釋山1号墳	1.27	緊急	墳丘・石室が崩落する	×・?	古墳
24	三須	公・道路拡幅工事	1.-	立会	遺構・遺物なし	×・×	-
25	小寺371-1外	公・消防庁舎建設	2.6・7	確認	包含層	○・×	△
26	黒尾1209外	分布調査	2.8	分布	新規古墳13基	×・?	古墳
27	門田717-1外	公・公共建物建設	2.10~14	確認	包含層	○・×	△
28	中原12-1外	公・上水道埋設	2.12	立会	砂礫層	×・×	×
29	森木1026-1外	公・道路拡幅工事	2.21	立会	包含層	○・○	○
30	赤浜1444外	民・駐車場造成	2.21	立会	包含層	○・○	○
31	久代2451外	分布調査	3.3	分布	古墳と包蔵地	○・○	古墳
32	三須118-2	公・農業水路工事	3.4	確認	低湿地	×・×	×
33	鶴社支線5807号道	公・道路拡幅工事	3.7	立会	包蔵地	○・-	○
34	金井戸347	民・建物建設	3.11	確認	包含層	○・×	△
35	三須支線3003号道	公・上水道埋設	3.12	立会	遺構・遺物なし(砂礫層)	×・×	×
36	南溝手265-1外	公・公共建物建設	3.25	確認	遺構・遺物なし(砂礫層)	○・×	×
37	井手1076-1	民・商業店舗建設	3.26	立会	包含層	×・×	△

○・×・△は遺構の有無と遺跡の可能性を3段階で示す。

?は不明。-は調査簿に記入なし



第2図 確認・立会調査位置図2 (S=1/40,000)

## 2. 確認および発掘調査概要

## 高本1・6号墳の発掘調査概要

遺跡名 高本1・6号墳、高本遺跡

所在地 総社市久代2348番地ほか

調査期間 平成3年10月16日～11月14日

調査面積 約500m<sup>2</sup>

### 調査経過

今回の調査は、岡山県立大学建設用造成に伴う土砂採掘に係わる事前の発掘調査である。調査地は高梁川本流にそそぐ、新本川の中流域に位置する独立丘陵上に立地している。昭和60年には同様に土砂採掘に伴って高本古墳群の2～5号墳が発掘調査され<sup>(1)</sup>、また平成3年にも同丘陵上の藤原北古墳群において発掘調査が行われている。このほかにも本丘陵南側で谷を挟んだ丘陵群では工業団地の造成に伴って大規模な調査が実施されている。<sup>(2)</sup>

### 検出遺構

調査墳は2基である。

1号墳は丘陵頂部に築かれた直径約17.5m・墳高約2mを測る円墳である。墳丘は西側斜面の傾斜が急であったことからこの部分のみに第1次の盛土を行い、続いて丘陵頂部を中心として径6～7・高さ0.8mの小古墳を築くような第2次の盛土がなされる。そして第3次の盛土はこの小古墳をふたまわりほど大きくするようにしている。各盛土はさらにいくつかのブロックに分層されるが、版築状のはっきりするところとそうでないところがあり、墳丘盛土全部が版築状に盛り上げられたものではない。

主体部の検出は困難を極めた。調査当初はその立地・規模から高本古墳群内の初葬墳であり、盟主墳と考えており、65年ほど前に盗掘されたものとはいえ、墳高2mを測ることから明瞭に主体部を残しているものと推定していた。しかし、調査が進むにつれ、石室石材はまったくなく、粘土錆とするような粘土ブロックも検出されなかった。墳丘上に十字に設定したトレンチのほかにさらに4分割のサブトレンチを設け、度重なる土層断面観察の結果、盗掘坑で掘削されながらも赤色顔料のわずかな分布、かつ断面U字形の痕跡を確認することができた。これらのことから主体部は割竹形木棺（長さ3.7・幅0.5m）と推定される。しかしこの木棺の据えられた位置は墳丘の中心よりやや南側に偏っていること。しかも土層観察等より推定される墓壙は径7mほどの円形に掘り回めたなかのその南半分のみをさらに掘り込んで主体部をしていることから、その北半分にもう1体埋葬する予定があったものと思われる。しかしながら、なんらかの理由でその埋葬は行われなかつたのであろうか。

6号墳は土砂掘削中に発見されたもので、周溝は確認されておらず、墳丘盛土のほとんどを

流出した小古墳である。主体部は箱式石棺で、内法長1.7・幅0.35～0.2mを測る。

また、1号墳の土層観察では古墳の造成が地山まで掘削されておらず、旧表土もしくはその焼き払いの状況が残されており、明らかに古墳以前の遺構が検出されたことから墳丘を取り除いて遺構検出を行った。その結果、総数7基の土塙墓群を検出した。土塙墓は長さ1.6～2.4・幅0.4～0.7mの範囲におさまり、中には2段墓塙となるものもある。また、その大半は小口板の掘り込みをもっている。

#### 出土遺物

1号墳からは、土師器の小破片のほか、埴輪とも考えられる土器片が数点出土したにすぎない。土師器片が墳頂部の掘削において出土していることから、墳頂部に置かれた遺物の大部分は流失したのであろう。しかし周溝と推定される浅い凹地から遺物がまったく出土しておらず、もともと遺物の量は少なかったものと推定される。主体部からはまったく遺物は出土していない。

6号墳、高本遺跡の土塙墓群からも遺物の出土はない。

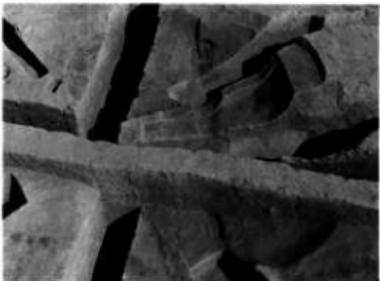
#### まとめ

1号墳は、その立地・規模から高本古墳群6基の初葬墳であり、盟主墳であったことはまちがいないであろう。高本2号墳が前Ⅰ期、3～5号墳が5世紀中葉以後と推定されていることから、1号墳の築造時期は2号墳とほぼ同じかそれ以前となろうが、時期を限定できる遺物が本調査からは出土していないので詳細は不明である。

1号墳の墳丘下からは、土塙墓群が検出されている。調査地の南、約100mの地点には高本遺跡が所在しており、弥生時代後期の住居跡等が検出されている<sup>(1)</sup>。この遺跡とは浅い鞍部を介して尾根続きとなり、高本遺跡の墓域となる可能性が考えられる。 (前角)

註 (1) 総社市教育委員会『高本古墳群』(『総社市埋蔵文化財調査報告』3, 1986)

(2) 総社市教育委員会『水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群』(『総社市埋蔵文化財調査報告』9, 1991)



第1図版 高本1号墳主体部



第2図版 高本遺跡土塙墓群

## 惣堂遺跡

### 秦地区農業集落排水処理建設に伴う発掘調査

所在地 総社市秦1954-1

調査期間 平成3年5月13日～6月6日

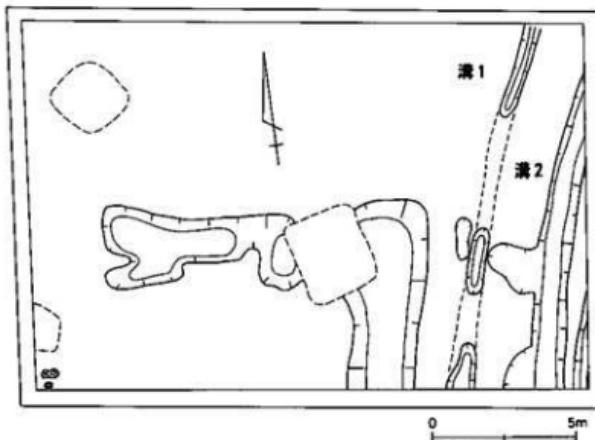
調査面積 300m<sup>2</sup>

#### 調査概要

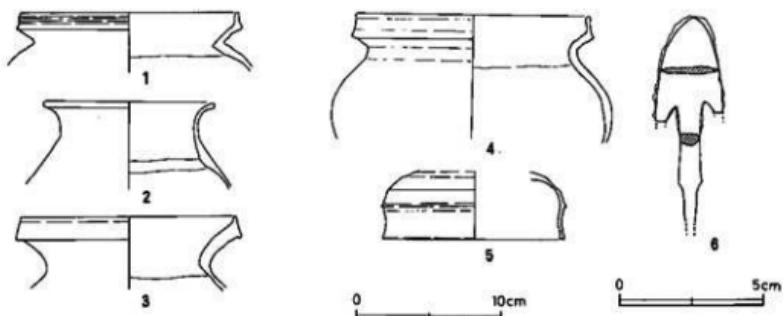
秦地区においていわゆる農村下水の処理施設の建設が計画されたため、平成2年3月23日に試掘を行ったところ、厚さ20cmほどの包含層が存在することが確認されていた。平成3年になって工事に着手することになったため、事前に発掘調査を実施した。

遺跡の位置は、高梁川右岸の堤防から秦の集落にはいる手前で、岡山厚生年金休暇センター入口道路との交差点の東側で、堤防から80mほど離れている。

調査地はもとはブドウ畠であったが、調査着手時には造成が行われており、もとの耕作面上に40～50cm客土されていた。造成面から遺構面（基盤層）までの深さは90～115cmで、隣接する畠の状況などを考慮にいれれば、調査区の南東から北西方向にゆるやかに下降する微高地



第4図 調査区平面図 (S=1/200)



第5図 出土遺物（1～3包含層、4～6溝3）

の縁辺部と推定できる。基盤層は、東ほど安定している。層序としてはこの上に厚さ10～20cmの暗茶褐色を呈する遺物包含層、さらにその上に灰色ないし灰黄色の粘質土や砂質土が2～3層、厚さ30cmほど認められた。灰色土からは、非常に磨滅した中世と思われる微細な土器片がごく少量検出された。包含層からは弥生時代から古墳時代にかけての土器片がコンテナ3箱分ほど出土したが、大半は磨滅が著しく、図示できるものはごくわずかだが大半は弥生時代後期のものと思われる。

検出された構造は、調査区東寄りの幅1mに溝たない溝、調査区中ほどで折れ曲がる浅い皿状の断面形を呈する溝、南西隅の柱穴状のおちこみなどである。溝1～3は微高地の端部を画するような機能を想定できるかもしれない。溝3からは須恵器の破片、鐵鏃1点が出土していること、包含層を切っていることから、古墳時代後半ごろと考えられる。幅広の浅い溝は、埋土からみて前述の溝3及び包含層よりも先行すると考えられるものの、遺物を出土していないため、確かな時期を示すにはいたらない。

これら遺構・遺物の状況から、当該地は高梁川の流路に沿って形成された微高地の縁辺部にあたると考えられ、本来の集落の中心は調査地の北東側に存在するものと思われた。これまで高梁川以西の地域については、飛鳥時代の寺院として知られる秦原廃寺など重要な遺跡が多くあるにもかかわらず、集落関係の資料はごく一部でしか知られていなかった。今回の調査の結果によりすくなくとも弥生時代後期ごろまでには高梁川の流路に近接した位置に集落が営まれていたらしいことが判明したことの意義は大きい。

（高田明人）



第3図版 調査区全景（北東から）



第4図版 遺構検出状況（南東から）

## 石原後遺跡

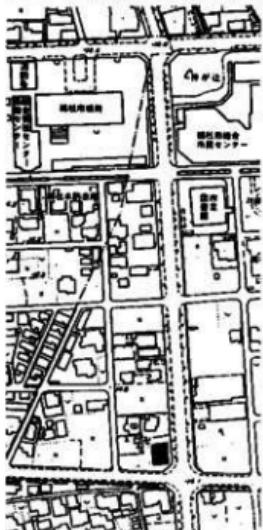
### 中央文化筋公園建設に伴う発掘調査

所在地 総社市溝口587  
調査期間 平成3年6月11日～7月6日  
調査面積 300m<sup>2</sup>

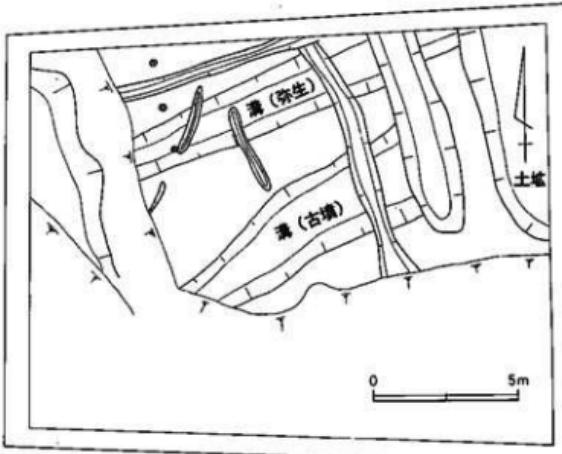
#### 調査概要

総社市役所東側の幅12mの道路は、中央文化筋として、文化施設やモニュメントの整備が行われている。その整備の一環として市役所から南へ200mほどの交差点沿いにポケットパーク的な機能をもつ公園の建設が計画された。用地取得後の平成3年3月に確認調査を行い、遺跡であることが判明していたため、今回工事に先立って発掘調査を実施した。

調査地は水田であったが、著しく削平をうけており、表土直下ですぐ安定した微高地となり、弥生時代から中世にわたる遺構が検出された。遺構は東西30m、南北15mほどの範囲に広がっている。南側は、深さ2m以上にわたって砂礫が堆積し、微高地が洪水などによって削りとられたような状況である。西側は、灰色砂質土の上に微高地の土が薄く堆積しており、これは中



第6図 位置図 (S=1/5,000)



第7図 遺構配置図 (S=1/200)

世までに埋没したらしい河道の肩口あたりであった可能性が有り、調査区西北隅で検出された浅い土塙からは他の中世の遺構とほぼ同時期の遺物が出土している。

検出された主な遺構は、溝・土塙・柱穴などで、弥生時代後期・古墳時代前半の溝が各1ある他はすべて中世のものである。

遺物は、弥生土器・土師器などであるが、量としては、古墳時代前半の溝から出土したもののが最も多く、中世の遺物がそれに次ぐ。弥生時代の遺物は僅少である。中世の遺物は碗・皿などの土師質のものがほとんどだが、土塙から出土したこね鉢は東播磨と考えられる。これらは13世紀初頭の年代を与えることができよう。

この遺跡の周辺は、区画整理が行われているため、本来の地形がわかりづらくなっているが、昭和55年から発掘調査を行った真壁遺跡につながる遺跡である可能性もある。検出された遺構のありかたから微高地の端部近くであったと思われ、中世の遺構から完形品や完形に近い土器が多く出土していることから、中世においては、何らかの祭祀にかかわる場所であったようである。

(高田)



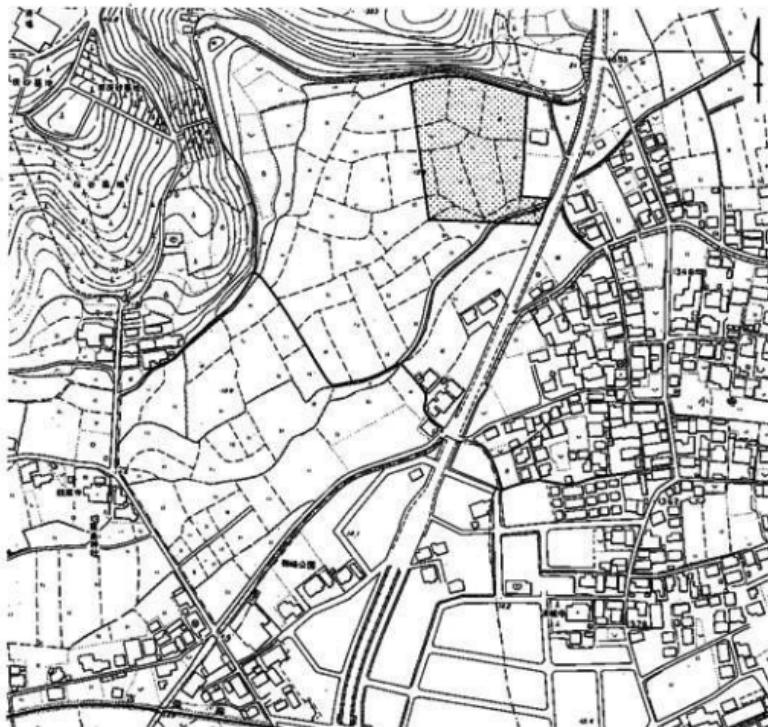
第5図版 調査区全景（南から）

## 新消防庁舎建設に伴う埋蔵文化財確認調査

所在 地 総社市小寺373番地外  
調査期間 平成3年4月15日～4月30日  
調査面積 約50m<sup>2</sup>

### 調査概要

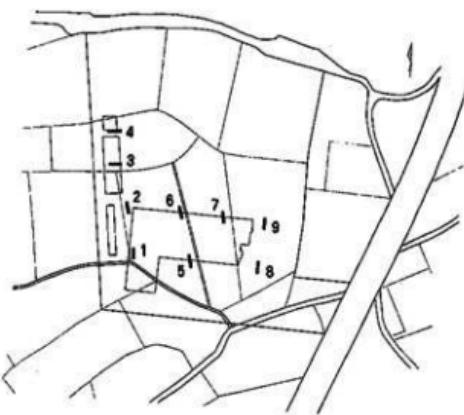
現消防庁舎は昭和47年に建設され、以来19年を経過している。しかし敷地等の関係から施設の拡充整備が図れず、緊急時の初動体制にも支障をきたしている。このため消防庁舎の移転建設が計画され、近年整備されてきた幹線道路を含めた最適地である市内小寺地内が選定された。



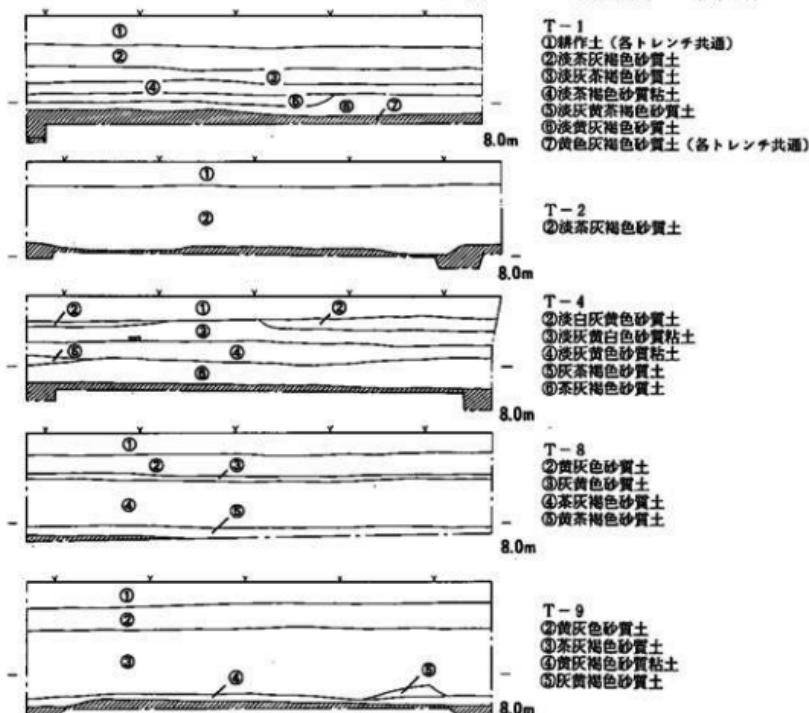
第8図 確認調査位置図 (S=1/5,000)

当該地は総社市街の住宅密集地のすぐ北に位置している。現状は水田であり、北接する低丘陵との間は低くなっている。東西方向に旧河道または低湿地の存在が推定される。

確認調査は平成3年4月15日から4月30日にかけて実施した。敷地全体を約1mの厚さで造成し、訓練場予定地等は掘削を行わないため、庁舎・車庫建設予定地に、トレンチを9本設定した。トレンチの規模は約1×5mである。敷地の北半分に旧



第9図 トレンチ配置図 ( $S=1/2,500$ )



10図 トレンチ断面図 ( $S=1/80$ )

河道の存在が予想されていたので、地形の傾斜を明らかにするため、トレンチの方向は基本的に南北方向に設定した。

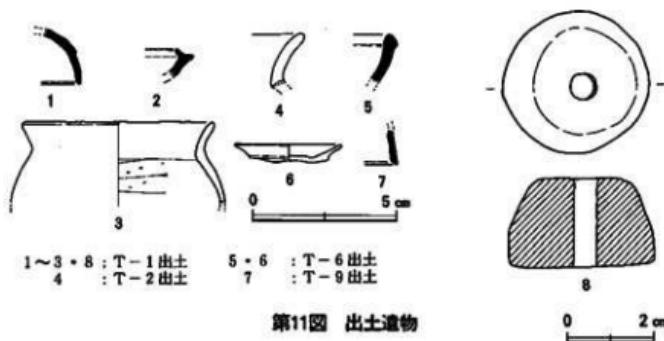
T-1では全体量としては少量であるが、今回の調査では一番多くの土器片を検出した。いずれも須恵器・土師器の小破片である。遺構は検出されなかったが、炭小片が認められた。このT-1～2～3～4にかけてはいずれも微高地であるが、北にいくにしたがってしだいに全体が低くなっている。やがて河道に至るものと推定された。土器片はいずれも小片であり、量的にも少量であった。

T-1～5～8及びT-2～6～7～9にかけてはわずかに東へ向かって低くなっている。また微高地が全体に南西に向かって高くなっていることが確認された。

全体としていずれのトレンチでも微高地の存在が確認され、土器小破片・炭化物等が認められている。しかし調査地内では明確な遺構が認められず、出土する土器片等也非常に少量であるため、調査地内に遺構が存在する可能性は低いと考えられた。

なお、基礎掘削時には立会調査を行った。

以上より、調査地は旧河道に南接する微高地端部に位置していると考えられる。微高地本体は南西方向に広がっていると考えられるため、近隣に集落遺跡が存在する可能性はある。



第11図 出土遺物

#### 出土遺物

いずれも土器及び土製品である。土器には須恵器・土師器・土師質土器がある。量的には少量で、小片が多く、図示できるものは少ない。

1・2・5・7は6世紀後半以降の須恵器であり、3・4は土師器。6は土師質の小皿である。8はT-1から出土した土製紡錘車である。橙色を呈し、胎土はやや荒く、焼成は良好である。

(高橋 進一)



第6図版 調査地全景（西方より）



第7図版 T-1 土層断面



第8図版 T-4 土層断面



第9図版 T-8 土層断面



第10図版 T-9 土層断面

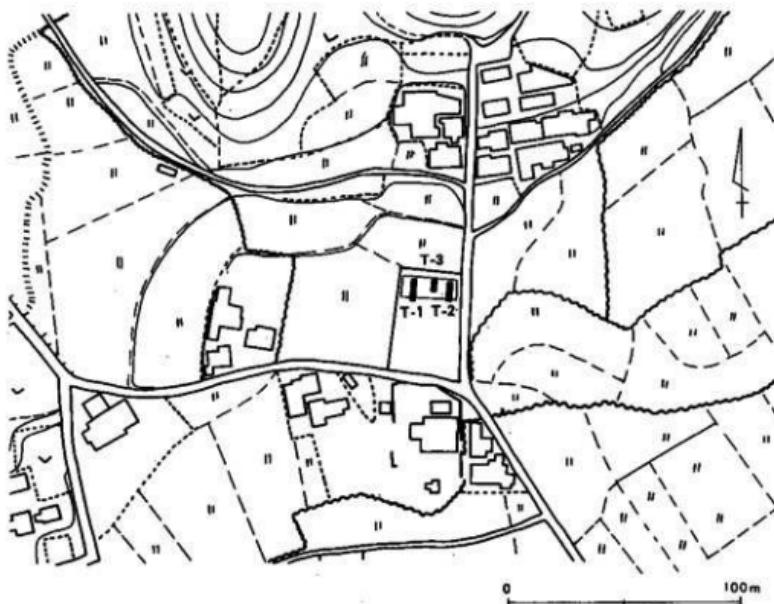
## シルバーワークプラザ建設に伴う埋蔵文化財確認調査

所在地 総社市門田 717-1  
調査期間 平成4年2月10日～14日  
調査面積 50m<sup>2</sup>（トレンチ調査）

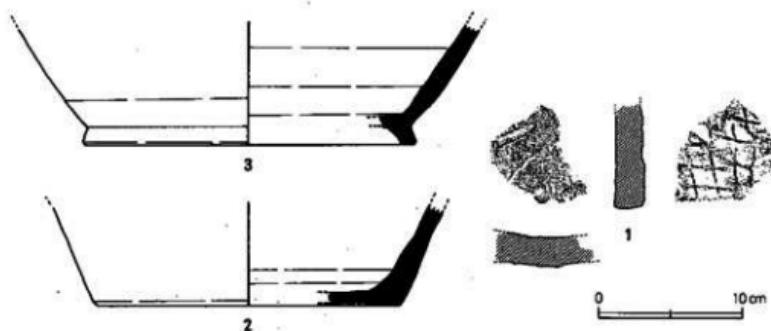
### 調査概要

現在市庁舎に隣接する総社市総合福祉センター内に事務所がある社団法人総社市シルバー人材センターが、上記の土地に新たにシルバーワークプラザを建設して移転することになったため、建設予定地について埋蔵文化財確認調査を実施した。

位置は、市の中心部から北西に約1キロほどのところで、幕末に争乱の舞台となった浅尾陣屋にほど近い。立地としては、市街地の北に東西にのびる低丘陵から派生した小さな尾根が平



第12図 トレンチ配置図 (S=1/2,500)



第13図 出土遺物（1 : T-1, 2 : T-2, 3 : T-3）

野と接するあたりで、南向きの緩斜面の先端である。調査地のすぐ南には寺院・神社があり、周辺は宅地化が進みつつあるが、現況は水田である。

調査は、建物の予定される部分にトレンチを設定し、必要に応じて拡張あるいはトレンチを増やすという方法で行った。T-1・2が $10 \times 2\text{ m}$ 、T-3が $5 \times 2\text{ m}$ で、等高線に直交する方向に設定した。T-1・2では、地表下50~60cmほどのところに厚さ20~30cmの遺物を若干含む層が認められたが、その下は軟弱な砂質土であり、地表下1mまで掘り下げたが、硬い地山層とはならず、無遺物である。T-3では地表下30cmほどで安定した地山となる。このことから判断すると、当該地はT-2を設定した中央部にごく幅のせまい馬の背状の尾根が南に向かっており、その両側は埋積谷のようになっていると考えられる。T-1で顕著に認められた遺物包含層は、軟弱な砂質土の上に堆積しており、その下面に遺構は認められなかったから、丘陵上方、すなわち北側からの流れ込みの可能性が高い。

遺物は、T-1の包含層中から弥生土器と思われる磨滅の著しい破片、古墳～奈良時代の須恵器片、中世の土師質土器片などが出土したほか、格子目叩きのある瓦片が1片認められた。T-2・3からは古代から中世と思われる破片が若干出土したのみである。

T-1出土の瓦片は、市内では新山庵寺などで知られるものに類似する。このあたりには寺跡があったということから現存する觀音寺の前身の寺院があった可能性を考慮する余地があるかもしれない。今回の調査範囲では明確な遺構は見出せなかったが、将来用地の南側に構築物が計画される場合には、調査を行う必要があると思われる。

(高田)

## 柏寺廃寺跡史跡整備に伴う確認調査

遺跡名 柏寺廃寺跡

所在地 総社市南溝手296

調査期間 平成3年11月5日～12月6日

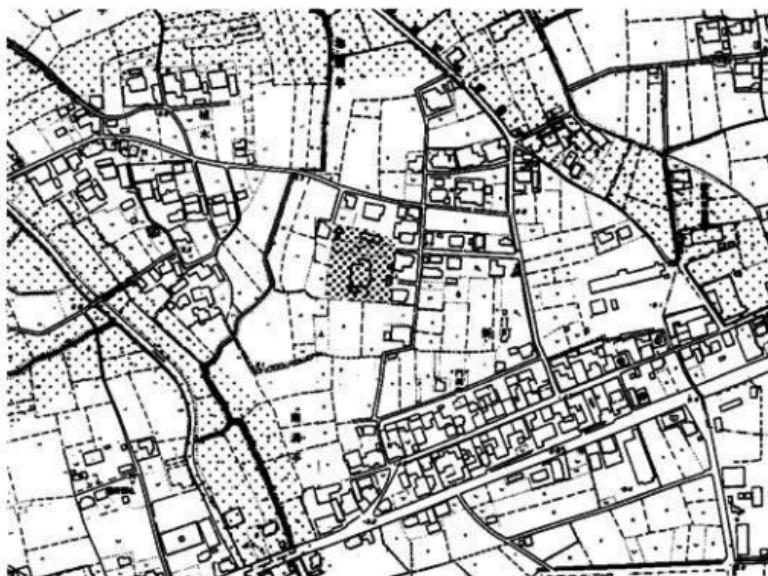
調査面積 約40m<sup>2</sup>

### 調査概要

柏寺廃寺跡は、昭和62年4月3日 岡山県重要文化財に指定された。市では昭和63年3月17日に旧門溝寺境内を取得した。その後、史跡整備を目的に昭和63年5・6月に確認調査を実施したが、塔基壇西で大型土塁を検出した他は白鳳・奈良期の造構は検出できなかった。そのため、史跡整備は、指定地の周辺整備と塔基壇を中心としたものとし、平成元年度で進入路を、平成2年度に周辺整備を行った。

今回の調査は、塔基壇を整備復元するために行った。塔基壇は、昭和53年に岡山県教育委員会が実施した緊急発掘調査から位置と推定規模が明らかとなっていた。

岡山県が実施した調査では、塔基壇の東及び北部分が最も保存状態が良好であった。このた



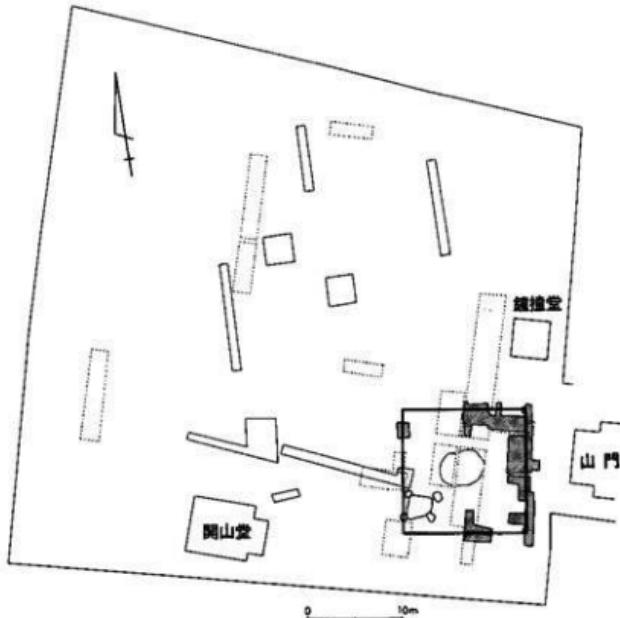
第14図 確認調査位置図 (S=1/5,000)

め、今回の調査は主としては塔基壇東半分を中心に行うこととした。

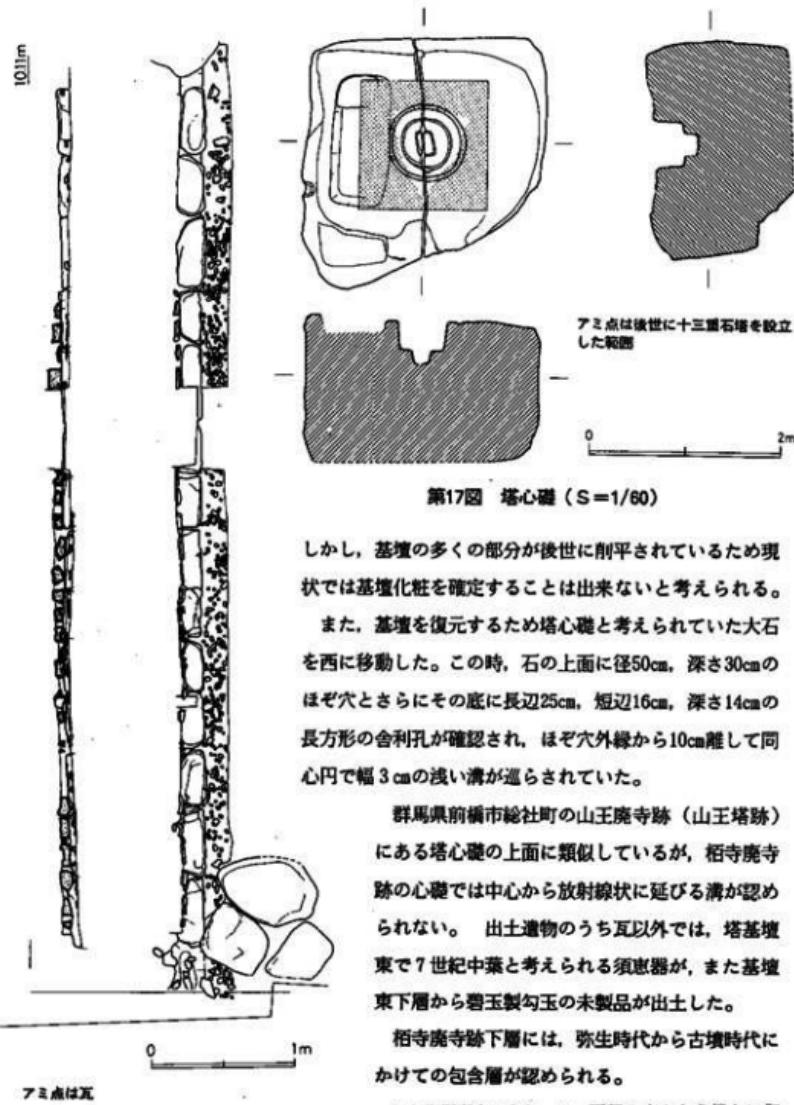
調査の結果、塔基壇東地覆石列のうち北東角と南半分がすでに残存していなかった。地覆石などの地上部分で塔基壇の規模が確定できないことから、掘り込み地業の範囲を確認することとした。掘り込み地業は基壇周辺玉砂利の下面からおよそ30cm掘り下げ、暗茶褐色土と円礫で突き固めていた。地覆石の前面をこの掘り込み地業の外郭線と一致させていた。塔基壇の掘り込み地業の一辺は13m20cm(44尺)であった。

基壇化粧は明らかにできなかったが、東地覆石列の内側に立てられた瓦片について状況をみると瓦はすべて破片であり、各々の間が僅かづつ開けられていた。また、瓦片は丸瓦と平瓦とが混在していた。これらの瓦片は地覆石の上に乗るものや倒れないように下に詰めをしたと考えられるものもあった。残存していた瓦片の多くは凸面に格子文叩目が認められ、縄目文叩目は存在しなかった。

この瓦片は上記の状況からやや粗雑であり、そのため幾つかの可能性が指摘された。一つには外壁にしては粗雑でありこれらの瓦片は表には見えない裏込めの役目をしている。またやや粗雑ではあるが、この瓦片を表に見える部分とし二重基壇の下成基壇外壁とする考えである。



第15図 トレンチ配置図 (S=1/600)



第16図 東地覆石列 (S=1/40)

しかし、基壇の多くの部分が後世に削平されているため現状では基壇化粧を確定することは出来ないと考えられる。

また、基壇を復元するため塔心礎と考えられていた大石を西に移動した。この時、石の上面に径50cm、深さ30cmのほぞ穴とさらにその底に長辺25cm、短辺16cm、深さ14cmの長方形の舍利孔が確認され、ほぞ穴外縁から10cm離して同心円で幅3cmの浅い溝が巡らされていた。

群馬県前橋市総社町の山王廃寺跡（山王塔跡）にある塔心礎の上面に類似しているが、栢寺廃寺跡の心礎では中心から放射線状に延びる溝が認められない。出土遺物のうち瓦以外では、塔基壇東で7世紀中葉と考えられる須恵器が、また基壇東下層から碧玉製勾玉の未製品が出土した。

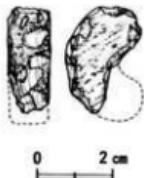
栢寺廃寺跡下層には、弥生時代から古墳時代にかけての包含層が認められる。

なお発掘調査にあたって、下記の方々から温かい御指導と御教示を得たことを記し、厚くお礼申し上げます。  
高橋謙、葛原克人、亀田修一  
(谷山 雅彦)

第3表 岡山県内古代寺院塔心礎一覧表

遺跡名	規模(m)	厚み(m)	柱座(m)	ほぞ穴(m) 径×深さ	舍利孔(m) 径×深さ
柏寺庵寺	2.57×1.57	1.5	——	0.51×0.30	0.25×0.16×0.14長方形
秦原庵寺	2.0×2.0	——	1.25方形	0.45×0.33	
幡多庵寺	2.86×2.56	——	——	0.95×0.02 6角形	0.445×0.18
惣爪庵寺	2.48×1.64	——	——	0.7×0.17	0.151×0.082
箭田庵寺	1.5×1.1	0.5	——	0.3×0.15	
八高庵寺	1.9×1.4	0.9	——	0.24	
関戸庵寺	2.65×1.94	0.6	——	0.32×0.14	
吉岡庵寺	1.25×1.16	0.7	——	0.63	
後月庵寺	1.47×1.29	——	——	——	
大海庵寺	1.7×1.14	0.6	——	0.2×0.12	
久米庵寺	2.1×1.5	0.8	——	0.23×0.15	
弓削庵寺	1.68×1.2	1.0	——	0.36×0.1	
英賀庵寺	1.9×1.7	——	1.35	0.36×0.245	0.15×0.12
備前国分寺	不明	——	——	——	

註 ほぞ穴と舍利孔については径が20cm前後のものは識別が困難なため記載文献に寄った。



第18図 出土遺物



第11図版 地覆石北東部分（北から）

## 備中国分寺五重塔の防火水槽建設に伴う確認調査

所在地 榛社市上林1046番地  
調査期間 平成3年11月11日～22日  
調査面積 60m<sup>2</sup>

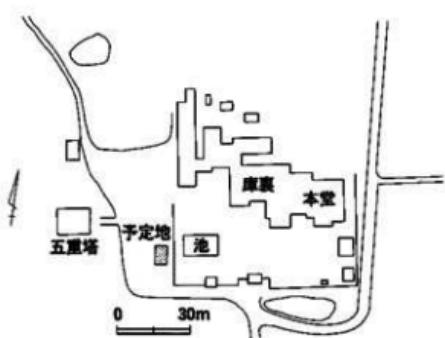
調査地は現在は真言宗備中国分寺境内の西に隣接する畠地である。この地点に平成3年8月になって1989年11月より解体修理中の五重塔用の放水銃と防火用水槽の設置が計画された。

候補地には古代の国分寺の遺構の存在が予想されたが、公有地であることや安全上、五重塔との距離などから最適の地と考えられた。

このため遺構の有無の確認が急務となりトレンチ調査を行なうこととなった。トレンチはまず予定地北端と南端に、現在の石垣土塀に直交するように東西に幅1m、長さ10mを設定し掘り下げた。

この結果、旧表土から約50cmまで近世造成土で埋められていることを確認した。造成土は真砂土で多量の布目瓦を含む。また現石垣から2m離れて南北に走る深さ約40cm、幅約1mの溝を検出した。この溝に沿ってトレンチを拡張したところ、溝は現石垣に平行していることが判明した。この溝と石垣の間には多量の近世瓦と布目瓦が堆積している状況が検出された。

この瓦溜りは近世瓦が破碎され、粘土と共に突き固められた上層と、古代の布目瓦のみが破碎されて敷き詰められた下層に分別できる。溝は近世にも踏襲されているようであるが底面から11世紀の土器片が出土したので、その開掘は古代以降であると考えられる。

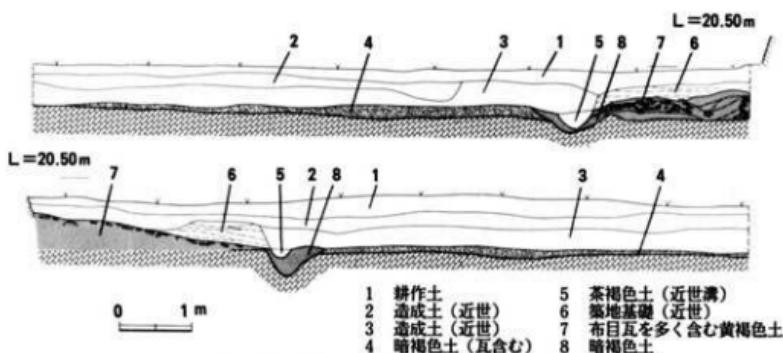


第1図 調査地位位置図 (S = 1/2,500)

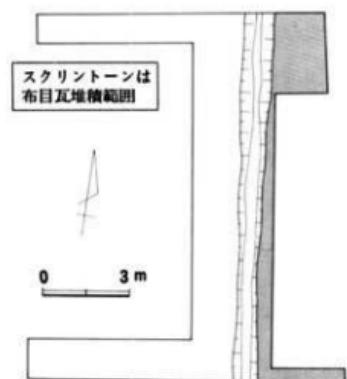
以上の結果から古代以降、近世以前に構築された瓦敷きの基礎とその前面の溝が近世になっても土塀の基礎と雨落ち溝として踏襲されていることが確認できた。

また、現在の寺域はこの古代以降の基礎部と溝の段階で確定したことも判明した。

創建時の備中国分寺については昭和46年、県教育委員会によ



第2図 北南壁土層断面図 ( $S = 1/80$ )



第1図 調査区平面図 ( $S = 1/200$ )

って確認調査が行なわれ、伽藍配置は不明であるが古代の寺域はほぼ確定した。それによると創建時の築地は今回、調査した溝より約50m西の現在の五重塔付近である。

今回の調査は建設予定地のみの小規模な調査のため創建時の遺構は検出されず、14世紀に焼失した後に再建された時期についても確定できなかった。ただ近世に再建された時に現在の境内と周辺が大幅に造成、改変されたことは確認できた。

なお、今回はっきりとした時期は不明ながら遺構が検出されたことにより建設予定地は北へ約50mの池跡に変更することになった。



第12図版 溝、布目瓦（北から）



第13図版 溝土層断面（南から）

## 平成3年度は場整備事業に伴う調査の概要

遺跡名　　産木薬師遺跡  
所在地　　総社市産木1169-1番地ほか  
調査期間　平成3年12月9日～平成4年3月27日  
調査面積　約1,400m<sup>2</sup>

### 調査経過

今回の調査は、県営土地改良総合整備事業として、市内産木・長良・下林地区のは場整備に伴う事前の発掘調査である。調査地は総社平野の東部、前川が大きく蛇行して形成された微高地に位置している。標高は約8mを測る。周辺の調査では、前川改修に伴う調査が本調査地のすぐ西側で行われたほか、赤浜は場整備や県立大学建設に伴う調査が行われている。

### 検出遺構

調査は、1～3調査区を設定して実施したことから、それぞれの調査区ごとにまとめておく。

1区で検出した遺構には、竪穴住居跡数軒、掘立柱建物跡数棟、井戸ほかである。竪穴住居はいずれも北壁中央に竈をもつ、4本柱の方形住居である。掘立柱建物には廂付きのものがあり、かつ檜列が伴うものが検出されている。

2区で検出した遺構には、おびただしい数のピット群の中から掘立柱建物数棟を検出したほかは、土坑・溝・井戸・畦畔などである。1区においては古墳時代から中世までの遺構がほぼ同一遺構面として検出できたものの、2区においてはおもに洪水砂による土砂堆積があり、いくつかの遺構面が確認された。第1遺構面が中世であり、洪水砂に埋り込まれたものである。第2遺構面は古墳時代の遺構面と考えられるが検出した遺構はほとんどない。そして、第3遺構面として、弥生時代と考えられる水田面の存在が予想されている。水田遺構は、土層断面の観察による畦畔の検出と一部鞋畔の方向を確認したほかは、明らかには場整備の施工高よりも深い遺構面となることや調査期間の関係などがあり、遺構の存在を確認したにとどまる。

3区も2区同様、ピット群の中より掘立柱建物が1棟検出されている。この建物は、3間5間の縦柱である。2区の掘立柱建物同様、東西方向の溝に平行となる配置であり、同一時代のものと考えられよう。

### 出土遺物

コンテナにして30箱ほどの遺物が出土している。土器では、弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器があり、圧倒的に土師質土器の出土点数が多い。

遺構出土の遺物については、整理途中であるものの、1区の竪穴住居跡と掘立柱建物跡から

はMT85期前後の須恵器が出土している。2区の掘立柱建物からは土師質土器が出土しており、1区の井戸出土土師質土器・白磁とあわせて、11~13世紀あたりの集落があったと考えられる。

#### まとめ

窪木薬師遺跡は、前川改修工事に伴って岡山県教育委員会による発掘調査が実施されている。今回の調査地はそのすぐ東側に位置し、幅10mの堤防を置くのみである。県教育委員会の調査においては、とくに銀治に関する遺構・遺物が検出または出土しており、古墳時代後半期の銀治集団の集落をメインとした遺跡といえる様相であった。市教育委員会が行った調査範囲では、その調査結果よりみて1区のみが古墳時代後半期集落の東端として住居跡が確認されたものの、2・3区においては住居跡が検出されないことや他の遺構もほとんど検出されなかったことから生活領域（居住地）外と推定される。銀治に関連する遺構は1区で検出された土坑のみで、同様な土坑が県教育委員会の調査でも検出され、銀治に関する遺構と推定されることから、本例も同じものと考えている。2・3区で検出された遺構は、ほぼ鎌倉期を中心とした時期であり、おびただしい数の遺構が検出されている。

なお、今回のは場整備対象面積は約10haであり、調査地の南東約200mの地点の農業排水路においても工事に伴って弥生時代の竪穴住居跡等が発見されており、窪木薬師遺跡のほかにも小集落が点在していたのであろう。

(前角)



第14図版 1区全景（南から）



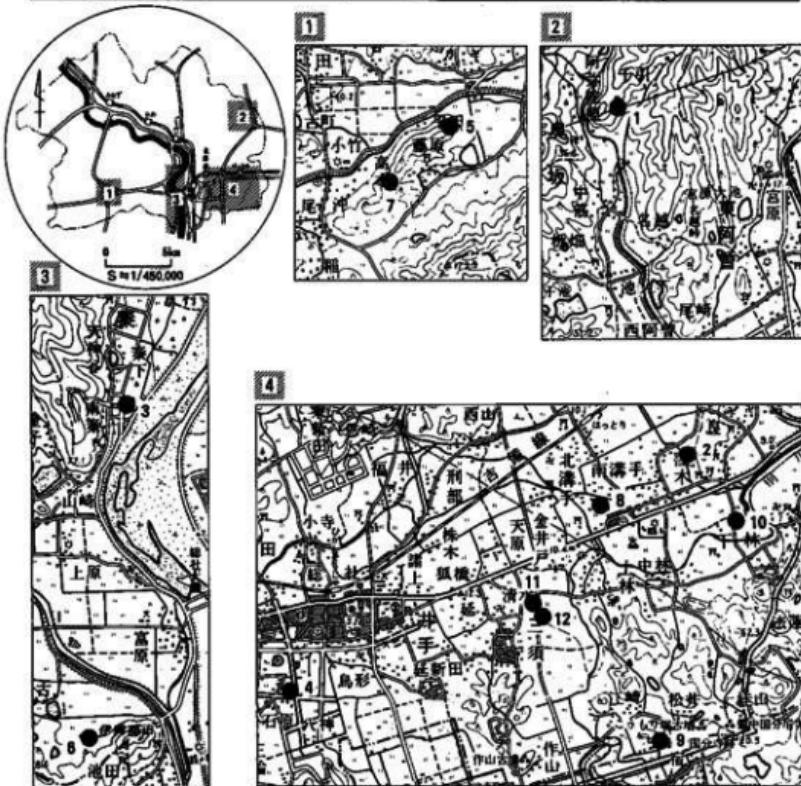
第15図版 2区建物群（東から）



第16図版 3区全景（東から）

第2表 平成3年度発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査契機	調査期間	備考
1	千引古墳群ほか	東阿雷1ほか	民・ゴルフ場開発	1. 4. 20~3. 8. 31	戦統調査・年報1
2	森木宮後遺跡	森木510-1ほか	公・道路	2. 4. 23~3. 8. 31	雑続調査・年報1
3	惣堂遺跡	森1954-1ほか	公・下水処理施設	3. 5. 16~6. 6	別稿報告・P 7
4	石原後遺跡	浦口587	公・公園施設	3. 6. 11~7. 6	
5	藤原北古墳群	久代2574-8	民・採土削削	3. 8. 26~9. 6	
6	伊与越山16号墳	下原489-2	民・土地改良事業	3. 9. 17~10. 18	
7	高木古墳群 高木遺跡	久代2348	民・採土削削	3. 10. 16~11. 14	別稿報告・P 5
8	括寺御寺跡	南溝手296	公・史跡整備	3. 11. 5~12. 6	別稿報告・P 18
9	備中國分寺跡	上林1046	公・防災工事	3. 11. 11~11. 22	別稿報告・P 22
10	森木蒸籠遺跡	森木1169-1ほか	公・ほ場整備	3. 12. 9~4. 3. 27	別稿報告・P 24
12	三須畠田遺跡	三須1059-1ほか	民・ガソリン スタンド建設	3. 12. 24~4. 1. 14	別稿報告・P 27
12	三須阿原遺跡 三須畠田遺跡	三須1059-1ほか	公・道路拡幅	4. 1. 16~2. 1	別稿報告・P 27



第3図 発掘調査位置図 (S=1/50,000)

### 3. 発掘調査報告

## 三須・畠田遺跡

## 図・図版目次

第22図	遺跡周辺図 (S=1/10,000) .....	30	第48図	H-9 平断面図 (S=1/80) .....	51
第23図	調査区配置図 (S=1/2,500) .....	34	第49図	H-11 平断面図 (S=1/80) .....	51
第24図	A区弥生時代遺構配置図 (S=1/300) .....	35	第50図	H-12 平断面図 (S=1/80) .....	52
第25図	H-5 平断面図 (S=1/80) .....	36	第51図	H-14 平断面図 (S=1/80) .....	53
第26図	H-13 平断面図 (S=1/80) .....	37	第52図	H-15 平断面図 (S=1/80) .....	53
第27図	H-10 平断面図 (S=1/80) .....	38	第53図	H-16 平断面図 (S=1/80) .....	53
第28図	H-10 出土遺物 (S=1/2, 1/4) .....	38	第54図	建物-1 平断面図 (S=1/80) .....	53
第29図	井戸-1 平断面図 (S=1/40) .....	39	第55図	建物-2 平断面図 (S=1/80) .....	54
第30図	井戸-1 出土遺物 (S=1/4) .....	39	第56図	建物-3 平断面図 (S=1/80) .....	54
第31図	土壤-1 平断面図 (S=1/40) .....	39	第57図	溝-2 平断面図 (S=1/500, 1/100) .....	55
第32図	土壤-2 平断面図 (S=1/40) .....	40	第58図	溝-2 出土遺物 (S=1/4) .....	55
第33図	土壤-3 平断面図 (S=1/40) .....	40	第59図	土壤-6 平断面図 (S=1/40) .....	56
第34図	溝-1 平断面図 (S=1/250, 1/80) .....	41	第60図	土壤-7 平断面図 (S=1/40) .....	56
第35図	溝-1 出土遺物 (S=1/4) .....	42	第61図	土壤-8 平断面図 (S=1/40) .....	56
第36図	溝-1 出土遺物 (S=1/4) .....	43	第62図	中世遺構配置図 (S=1/300) .....	57
第37図	溝-4 平断面図 (S=1/200, 1/80) .....	44	第63図	建物-4 平断面図 (S=1/80) .....	57
第38図	A区古墳時代遺構配置図 (S=1/300) .....	45	第64図	建物-5 平断面図 (S=1/80) .....	58
第39図	H-1 平断面図 (S=1/80) .....	46	第65図	建物-4 土壤出土遺物 (S=1/4) .....	58
第40図	H-2 平断面図 (S=1/80) .....	47	第66図	B区遺構配置図 (S=1/300) .....	59
第41図	H-3 平断面図 (S=1/80) .....	47	第67図	H-17 平断面図 (S=1/80) .....	60
第42図	H-4 平断面図 (S=1/80) .....	48	第68図	H-18 平断面図 (S=1/80) .....	60
第43図	H-4 カマド平面図 (S=1/40) .....	48	第69図	H-19 平断面図 (S=1/80) .....	61
第44図	H-6 平断面図 (S=1/80) .....	49	第70図	H-20 平断面図 (S=1/80) .....	61
第45図	H-6 出土遺物 (S=1/4) .....	49	第71図	H-21 平断面図 (S=1/80) .....	62
第46図	H-7 平断面図 (S=1/80) .....	50	第72図	H-21 溝出土遺物 (S=1/4, 1/2) .....	62
第47図	H-8 平断面図 (S=1/80) .....	51	第73図	土壤-10 平断面図 (S=1/40) .....	63
			第74図	土壤-10 出土遺物 (S=1/4) .....	63

## 図版目次

第17図版	1.三須・島田遺跡調査前(南から) .....	65	2.H-3 (南から) .....	68	
	2.H-5 (西から) .....	65	第21図版	1.H-7 (南から) .....	69
第18図版	1.H-13 (西から) .....	66		2.H-8 (南から) .....	69
	2.H-10 (東から) .....	66	第22図版	1.H-12 (南から) .....	70
第19図版	1.H-1 (南から) .....	67		2.H-17 (南から) .....	70
	2.H-4 (西から) .....	67	第23図版	1.H-20 (北から) .....	71
第20図版	1.島田遺跡A区調査区全景 .....	68		2.H-18 (北から) .....	71

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査にいたる経過

岡山県の南西部に位置する総社市は、吉備高原の南端にあたり平野には数多くの低丘陵がのびている。これらの低丘陵には多数の古墳が築造されており、県内でも有数の古墳密集地帯となっている。また平野には縄文時代後期以降、肥沃な生産基盤を背景とした集落が連続と形成されてきた。

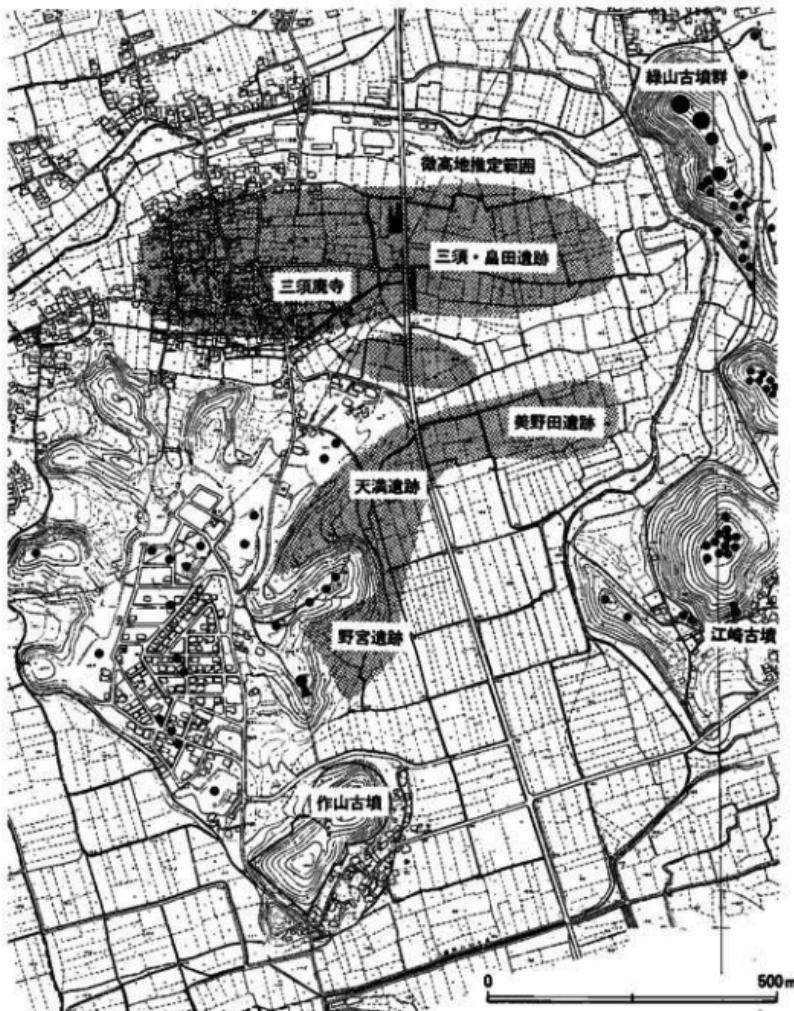
しかしながら近年、県南部で進行している大規模開発に伴う交通網の整備が総社市内でも進行し始めた。特に国道180号線と清音真金線を結ぶ農免道路は常時、交通量が多く沿線に観光センターの建設が計画されたことや県立大学の建設、新岡山空港への連絡道として特に重要性が高まってきた。このため農免道を429号線に昇格させ拡幅することが計画され、土地買収等が平成2年度から行われてきた。このことに伴い沿線で民間開発が行われることも予想された。

平成2年3月10日に（株）三菱石油広島支社より、市内三須地内の国道拡幅予定地沿いにガソリンスタンドを建設する開発申請が提出された。教育委員会では予定地は地形から判断して十分に遺跡の存在が予想されるため、擁壁工事開始時に立会を行う旨を回答した。12月下旬になり予定地内の耕作土の除去時に文化係職員が立会したところ遺構多數を確認した。

この結果をもとに（株）三菱石油と文化財保護に関する覚書を締結し保存協議を行った。その結果、計画の変更は困難なため掘削部についてのみ約300m<sup>2</sup>を発掘調査を行い、盛土部は保存に配慮して工事を行うこととなった。

発掘調査は平成3年12月24日より開始したが、1月になり県教育委員会文化課と倉敷地方振興局より現道とガソリンスタンド用地の間地についての要望があった。すなわち、この間は将来、国道を拡幅する時点で発掘調査を県教委が行う予定であるが、ガソリンスタンド開業後では調査が営業と重なり困難なため合わせて発掘調査を実施してほしいということであった。このため、国道拡幅部約450m<sup>2</sup>については地方振興局の経費負担で調査を行うことになった。

また1月中頃になり調査区南100mの国道拡幅部の側溝300m<sup>2</sup>の調査を諸情勢により県からの委託であわせて市教委で対応した。



第22図 遺跡周辺図 (S=1/10,000)

## 第2節 調査の体制

発掘調査は、ガソリンスタンドについては㈱三菱石油が、また国道予定地については倉敷地方振興局の経費負担により、総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導助言のもとに実施することとなった。調査は平成3年12月24日から、平成4年2月1日までの19日間実施した。なお、調査にあたり、まつもとコーポレーション㈱と大伸建設工業㈱には種々の便宜を図っていただいた。また発掘作業については、厳寒のなか地元住民の方々の協力を得た。記して厚く謝意を表します。

### 調査組織

社会教育課（文化係）

課長 平田定士

主幹 村上幸雄

係長 森田忠志（庶務担当）

主事 荒木泰行（庶務担当）

主事 武田恭彰（調査担当）

作業員 岡治生 岡増美 大村務 林旬 中島勝己 林智恵子 林幸 岡崎和 梶谷幸子  
光畠都

整理作業 西平登代子 横田和美

なお調査時に遺構実測等に文化係職員高橋進一の協力を得た。

## 第2章 地理的・歴史的環境

三須・畠田遺跡は総社市三須に所在する。

総社平野の南には標高200～300mの主峰をもつ山塊が北東から南西にのびる。この山塊からは、南北にいくつもの低丘陵が発生しており、仕手倉山から発して北にのびる標高30～80m前後、長さ約3.5km、幅約1kmの低丘陵群が、俗に三須丘陵と呼ばれている。

この丘陵上もしくは周辺には数多くの遺跡が確認されている。特に吉備地方を代表するような遺跡、すなわち造山古墳・作山古墳・こうもり塚古墳・寺山古墳などの前方後円墳と数百基の小古墳、また備中國分僧寺・尼寺などが挙げられる。

これらの遺跡を残した人々の生活の場としては、主として三須丘陵と吉備高原の南端の間に広がる総社平野が考えられている。この平野は西を高梁川、東を足守川で画されているが、さらに高梁川より東に分流した大小の河道によって細く微高地が形成されている。この微高地上には集落が、また低位部には水田が存在していたことは容易に想像できる。

また近年の岡山県立大学の建設に伴う調査により、この平野が縄文時代の晩期には水田として開発されたことが明らかになった。その後、弥生時代後期になると爆発的に集落が拡大することが各所の発掘調査により明らかになっている。

しかし、古墳時代の集落については真壁遺跡で一部が明らかになっただけで不明な点が多い。また古代以降についても備中國府が総社平野に存在することは予想されているが不明である。

今回調査を行なった畠田遺跡の北約100mには東西に低位部が存在するが、これが古代に北の賀陽郡と南の窪屋郡とを分ける「郡境の河道」であったことが先学によって提唱されている。この窪屋郡側で、本遺跡の西約200mの現在の集落の中には三須廃寺の存在が想定されてしまう。そして、今回の調査で奈良時代前半の須恵器や丹塗りの土師器、布目瓦などが出土地で出土したことや、推定地で小量ながら白鳳期の瓦も以前採集されていることから、創建時代と位置について若干の資料の補強を行なうことができた。

中世では、本遺跡の北約300mで清水角遺跡が調査されている。13世紀の井戸1基が検出され土師器の碗が多量に出土した。青磁・白磁が共伴することから、ある程度の富裕層の存在が予想できる。

### 第3章 発掘調査の概要

遺跡は高柴川の分流が運搬する土砂・砂利・礫によって形成された微高地と考えられている。遺構が立地する基盤上は柔らかい微砂であるが、深さ約1mで、拡大の礫・砂利層になる。田面の海拔高は約10m前後で東・北・南に緩かに下降し、現在の景観でも当時の河道・低湿地を推定することが可能である。

調査はまずガソリンスタンド建設予定地の部分の確認調査を行い耕作土直下で全面に遺構の存在を確認した。そして、地下に影響する構造物の予定地約290㎡について発掘調査を行うこととなった。その後、隣接する県道拡幅予定地790㎡の調査も確認の結果、遺構が検出されたため併せて調査を行うこととなり実施した。

耕作土の除去は重機を用いて行ったが、いずれの調査区でも鋪床層を除去すると遺構面が検出できた。遺跡の位置する微高地は、過去に水利のため地下げがかなり行われていたため弥生時代から中世まで同一面で遺構が確認できた。

調査区はガソリンスタンド部分と県道拡幅部をA区、南の県道側溝基礎部をB区とし、基準測点は県道拡幅用に設定された杭を利用した。

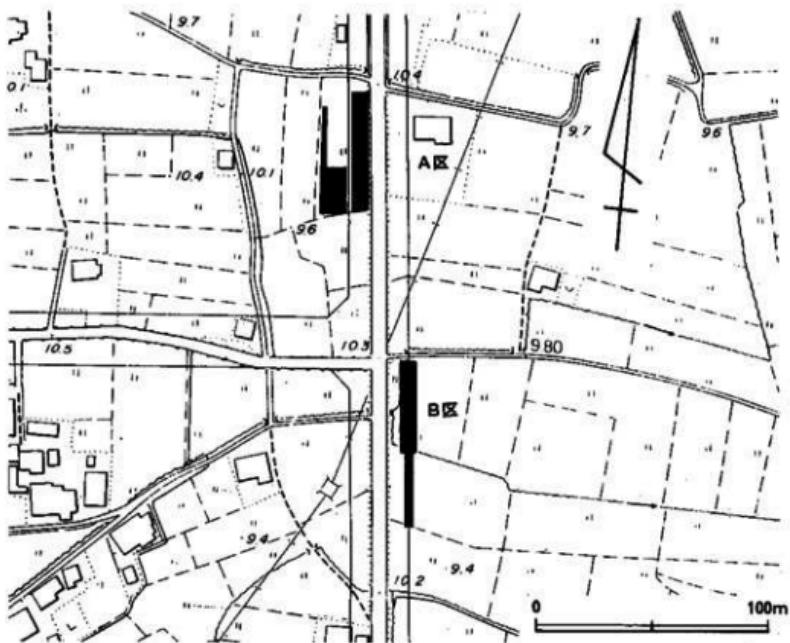
調査は、まずA区より行い西半分が終了した後に排土置場とし、東半分とB区の調査を行った。このため同じ遺構を分割して調査する結果となり、歴史的景観の復元という点では、悔まれることとなった。

遺構はA区では弥生時代中期から後期の住居址3、溝2、土壤3、井戸1、古墳時代の住居址13、建物3、溝3、土壤3、中世の建物2が検出された。遺物は主として調査区を南北に貫く溝-1から出土したが、この溝は弥生時代から古墳時代まで踏襲されており、これを境に古墳時代の住居址群の様相がやや異なっている。

中世の柱穴は調査区全面に点在しているが、建物の柱穴として確認できたものは少ない。B区は、南北に幅4m～5mの細長い調査区のため、遺跡の一端しか検出し得なかったが、弥生時代中期の溝1、古墳時代の住居址5、溝1、奈良時代の土壤1を調査した。

また調査区の南端に旧河道の両部を確認したが、住居址が隣接していることや、基盤層が下降していないことから人工的に形成されたのは古代以降であると考えられる。この旧河道は工事時の立会によって深さ4m以上であることを確認した。

調査は砂質の基盤層からの湧水や崩落に悩まされながらも天候に恵まれ、2月1日に無事終了した。



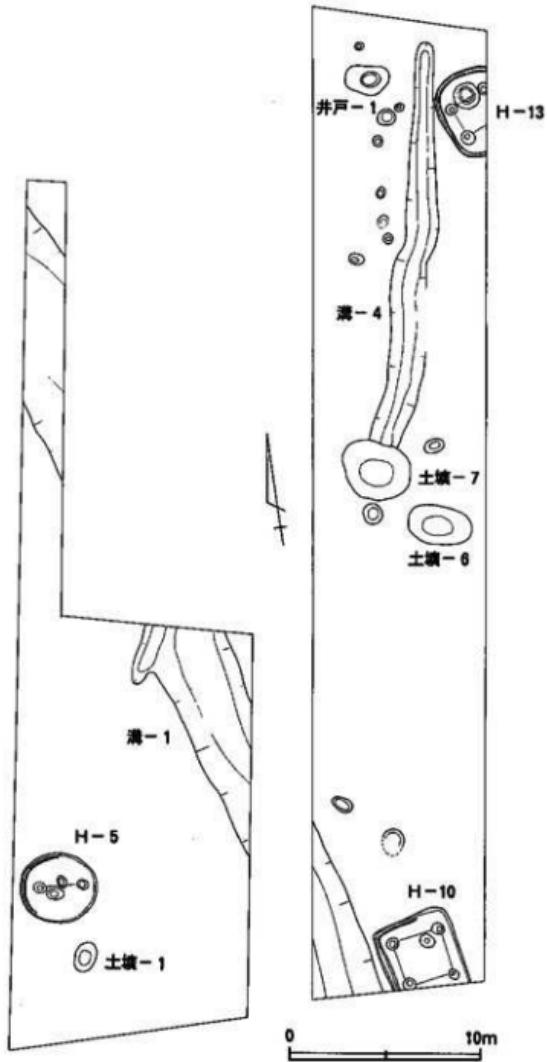
第23図 調査区配置図 (S=1/2,500)

## 第1節 A区の調査概要

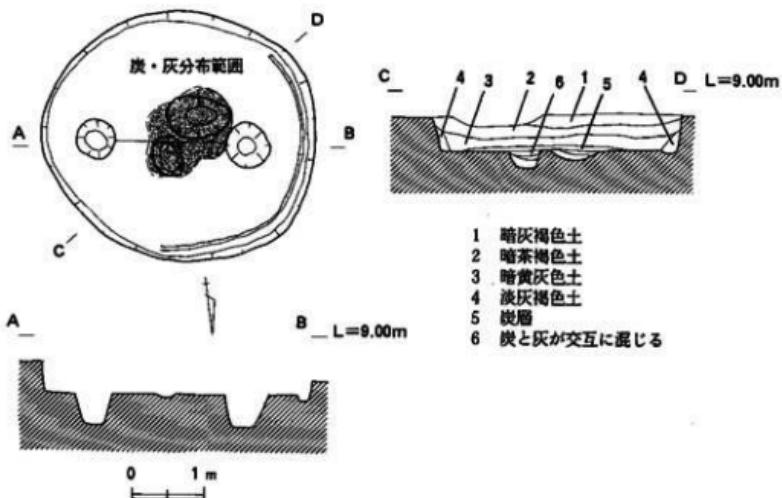
### 1. 弥生時代の遺構・遺物

#### 堅穴住居H-5（第25図）

H-5は調査区南西端に位置している。平面形は円形を呈し、南北長3.4m、東西長3.8mを測る。残存する壁高は約50cmで床面には炭を多く含む2つの中央穴をもつ。主柱穴は2本で深さ約40cmである。住居址の埋土は基盤土とほとんど区別がつかない淡黄褐色砂で、わずかに炭を含むことにより識別が可能であった。床面は中央穴付近はよく締まっているが、全体的に軟弱である。住居址に伴う遺物ほとんど出土せず時期は不明であるが弥生時代後期と考えて差しつかえないと思われる。



第24図 A区弥生時代遺構配置図 (S=1/300)



第25図 H-5 平断面図 ( $S=1/80$ )

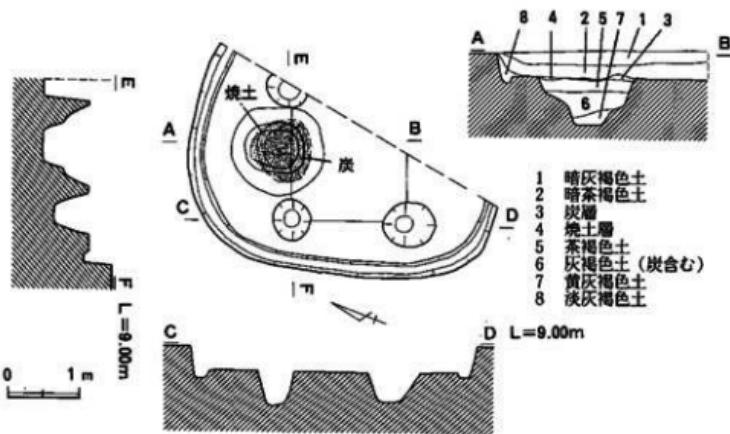
#### 竪穴住居H-13（第26図）

H-13は調査区北端に位置し東側約3分の1が調査区にかかる。平面形は隅丸方形で推定で南北長4.4mと思われる。残存する壁高は約40cmで埋土は黒褐色の砂質土である。床面北壁寄りに中央穴があり埋土は炭を多く含み、一部被熱赤化している。主柱穴は4本で構成されるとと思われ、調査した3本は深さ40cm～50cmであった。床面はよく締っており、壁体溝も明瞭に検出できたが、住居址に伴うと考えられる遺物はまったく確認できなかった。時期としては住居址の構造や周辺から出土した小片より弥生時代後期と考えたい。

#### 竪穴住居 H-10（第27図）

H-10は調査区南端に位置し、南壁が調査区外にかかる。平面形は方形で東西長3.9m、南北長推定で4.1mを測る。残存する壁高H-6と重複していることと相まって検出は困難を極めた。

床面は薄く炭が散布しているのみで全体的に締まりがなく軟弱である。中央穴は深さ約20cmと浅く、炭と焼土粒が含まれていたが、被熱痕跡は確認できなかった。



第26図 H-13平断面図 (S=1/80)

遺物としては床面上により壺・甕の破片と北壁際の壁体溝上より分銅型土製品の完形が出土した。(第28図) 住居の時期としてはこれらの遺物から弥生時代中期後半が考えられる。

#### 井戸-1 (第29図)

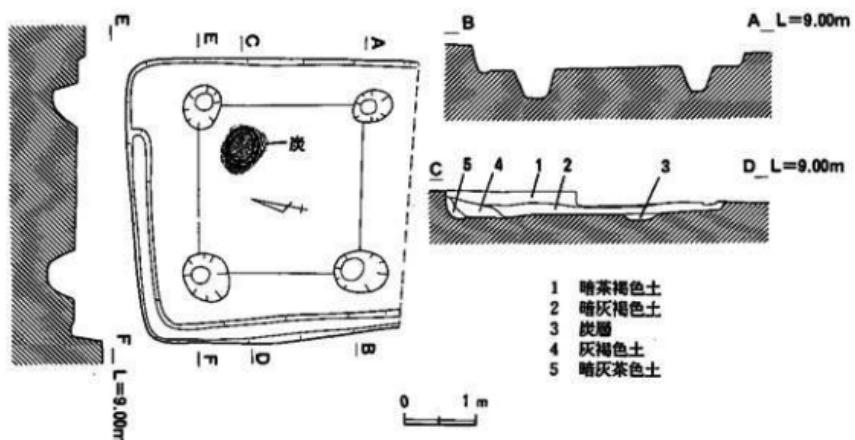
井戸-1は調査区北端近くに位置する。平面形は梢円形を呈し東西長4.1m、南北長3mを測る。現存する深さは約2.2mで約1mの地点で段状に広がり、直径1.8mのグライ化した湧水部が掘りこまれている。埋土は上下2層に大別でき、上層より甕片が重なった状態で出土した。埋土は自然堆積状に埋積していることから時期としては弥生時代後期前半頃に埋没したと考えられよう。

#### 土壤-2 (第32図)

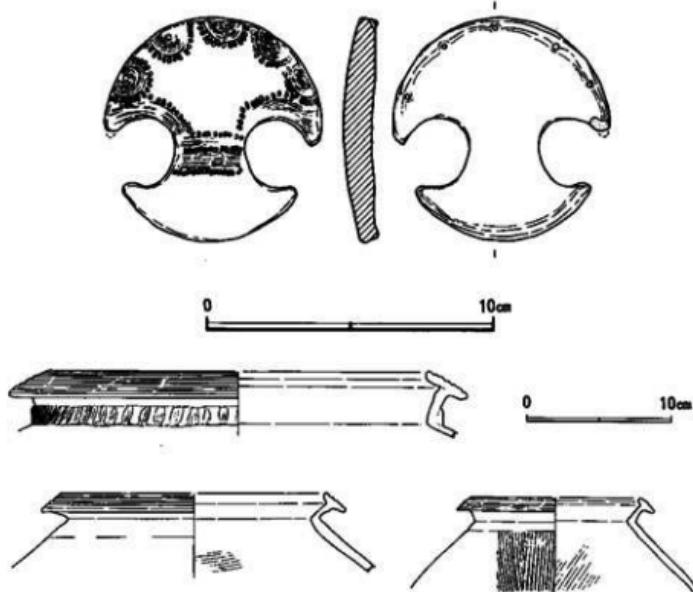
土壤-2は調査区中程に位置し、平面形は3.2m×2mの梢円形を呈している。現存する深さは約50cmで底面は平坦に近い。埋土は灰黄色の砂質土で若干、炭を含む。遺物はほとんど出土しなかったが時期としては弥生時代後期と思われる。

#### 土壤-3 (第33図)

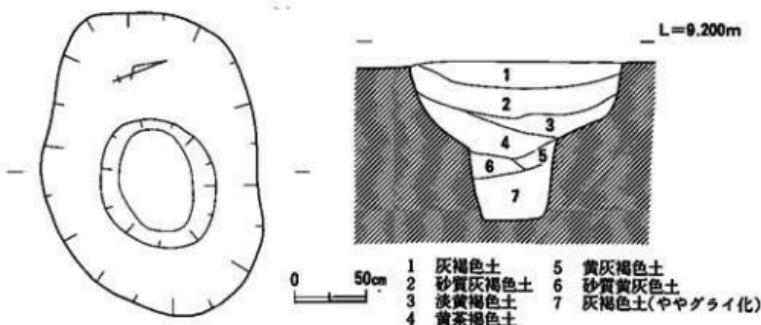
土壤-3は調査区中程に位置し、後述する溝-4を切っている。平面形は直径3m前後のいびつな円形を呈し、底部は舟底状で現存では約50cmを測る。埋土は隣接する土壤-2と同様で遺物はほとんど出土しなかったが弥生時代後期と考えられる。



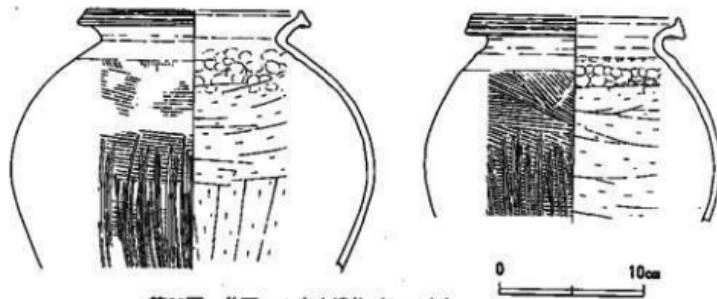
第27図 H-10平面断面図 ( $S=1/80$ )



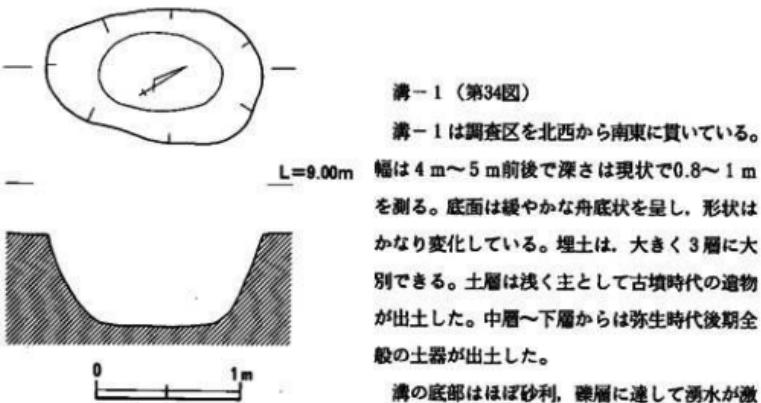
第28図 H-10出土遺物 ( $S=1/2, 1/4$ )



第29図 井戸-1 平断面図 ( $S=1/40$ )



第30図 井戸-1 出土遺物 ( $S=1/4$ )



第31図 土塹-1 平断面図 ( $S=1/40$ )

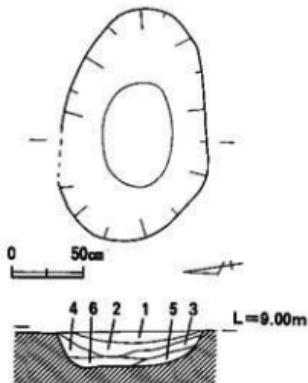
#### 溝-1 (第34図)

溝-1は調査区を北西から南東に貫いている。幅は4m～5m前後で深さは現状で0.8～1mを測る。底面は緩やかな舟底状を呈し、形状はかなり変化している。埋土は、大きく3層に大別できる。土層は浅く主として古墳時代の遺物が出土した。中層～下層からは弥生時代後期全般の土器が出土した。

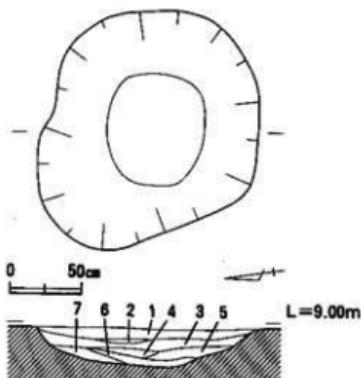
溝の底部はほぼ砂利、疊層に連して湧水が激しい。

- 1 淡灰茶褐色土
- 2 灰茶褐色土
- 3 淡茶褐色土
- 4 淡褐色土
- 5 黄茶褐色土
- 6 淡黄褐色土

- 1 淡灰茶褐色土
- 2 砂質の淡茶褐色土
- 3 灰褐色土
- 4 黄灰褐色土
- 5 黄褐色土
- 6 暗黄褐色土
- 7 茶褐色土（炭を含む）



第32図 土壌-2 平断面図 ( $S=1/40$ )



第33図 土壌-3 平断面図 ( $S=1/40$ )

溝-1は調査区外へも伸びることは後日確認したが、微高地中央を北西から東西に開墾されたのは出土した土器により弥生時代後期前半と思われる。これはH-10と近接していることからも矛盾はない。その後に徐々に埋没しながらも機能は維持され完全に埋まったのが古墳時代後期で直前まで集落中央の溝として意識されていたと考えられる。

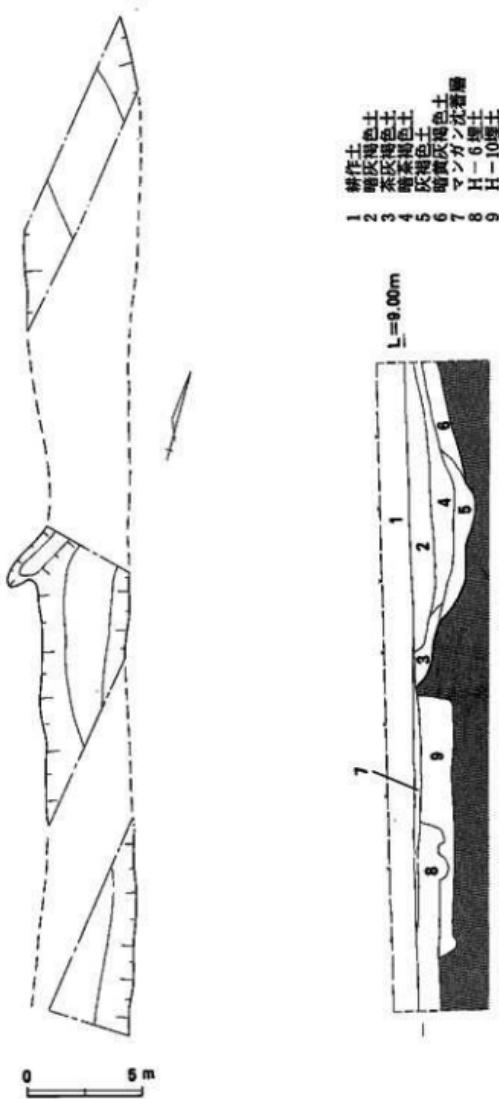
また、基盤層の下の砂利、疊層は南東に下降していることから溝の掘削時には地理的条件が十分配慮されていると言えよう。

#### 溝-4（第37図）

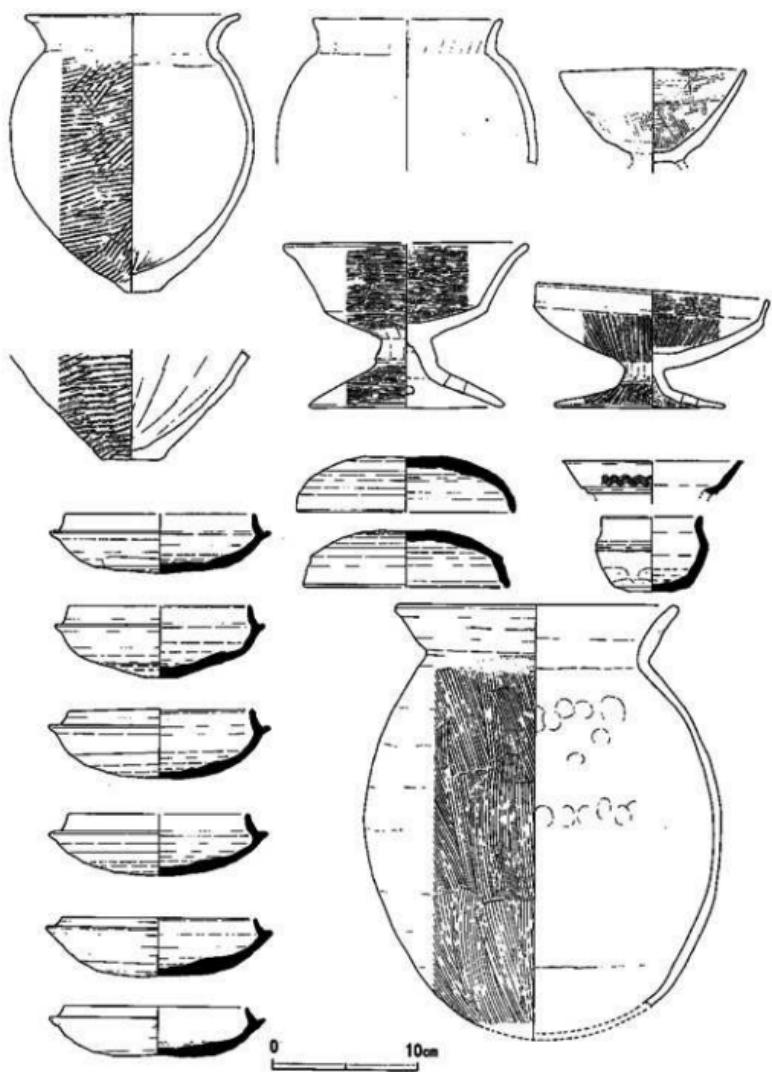
溝-4は調査区北端から中程、南北に流れる。幅は2m前後で深さは40mで徐々に北に浅くなる。底面は浅い舟底状を呈し埋土は黄灰色の砂質土である。

遺物は少ないが弥生時代中期後半の土器片を含む。

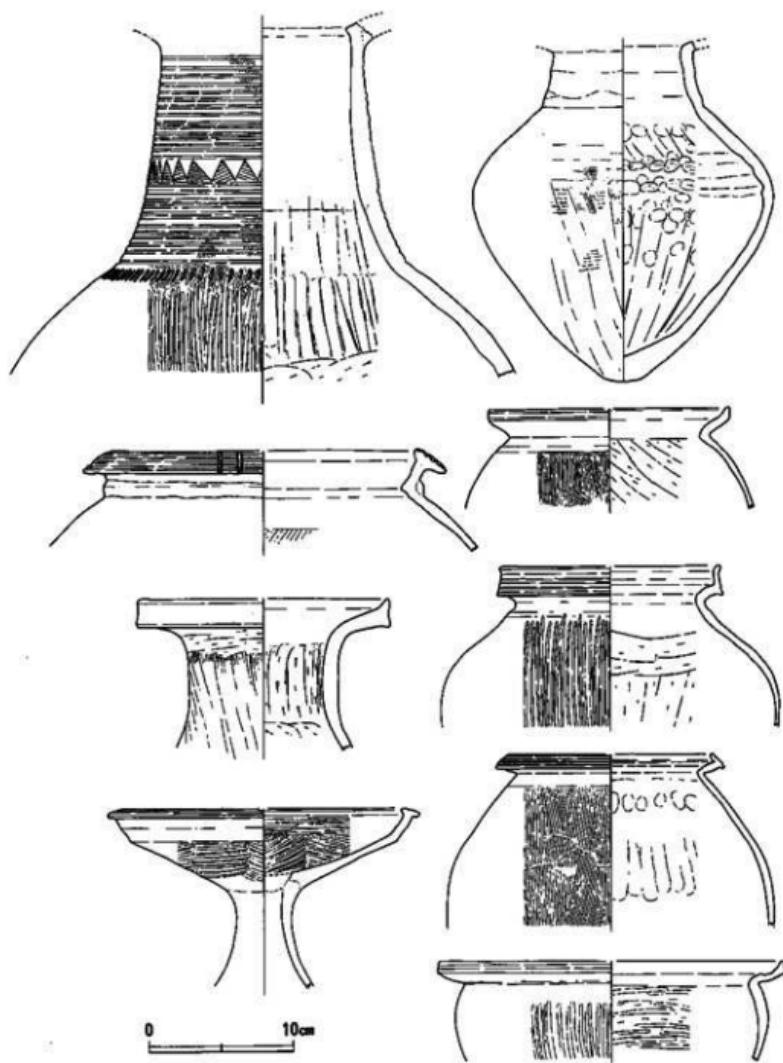
以上がA区の弥生時代の遺構の概略である。弥生時代の遺構は後述するB区では少なく、出土した遺物も遺構もほとんどがA区のものである。



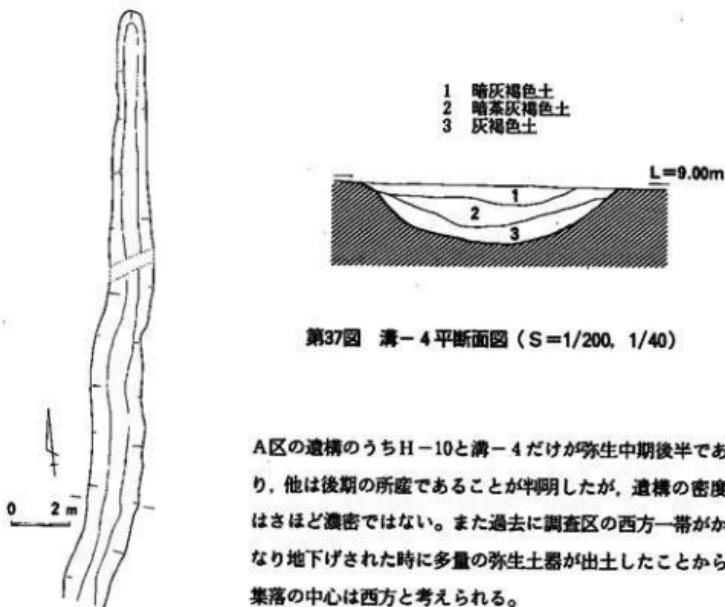
第34図 溝-1 平断面図 ( $S=1/250, 1/80$ )



第35図 溝-1出土遺物 (S=1/4)



第36図 滋-1出土遺物 ( $S=1/4$ )



第37図 溝-4 平断面図 ( $S=1/200, 1/40$ )

A区の遺構のうちH-10と溝-4だけが弥生中期後半であり、他は後期の所産であることが判明したが、遺構の密度はさほど濃密ではない。また過去に調査区の西方一帯がかなり地下げされた時に多量の弥生土器が出土したことから集落の中心は西方と考えられる。

## 2. 古墳時代の遺構・遺物

古墳時代の遺構はA区の全面に検出される。調査区中央を斜めに貫く溝-1は古墳時代になつても半分以上埋没しながら機能している。

住居址は一部重複するものもあるが、同じ方向で隙間には掘立柱建物が位置している。この時期の竪穴住居はカマドが付くのが一般的であり、本跡でも調査区外に大半がかかるものを除いてカマドが付設されていることが確認された。

調査した遺構は、竪穴住居13軒、建物3棟、溝3条などである。

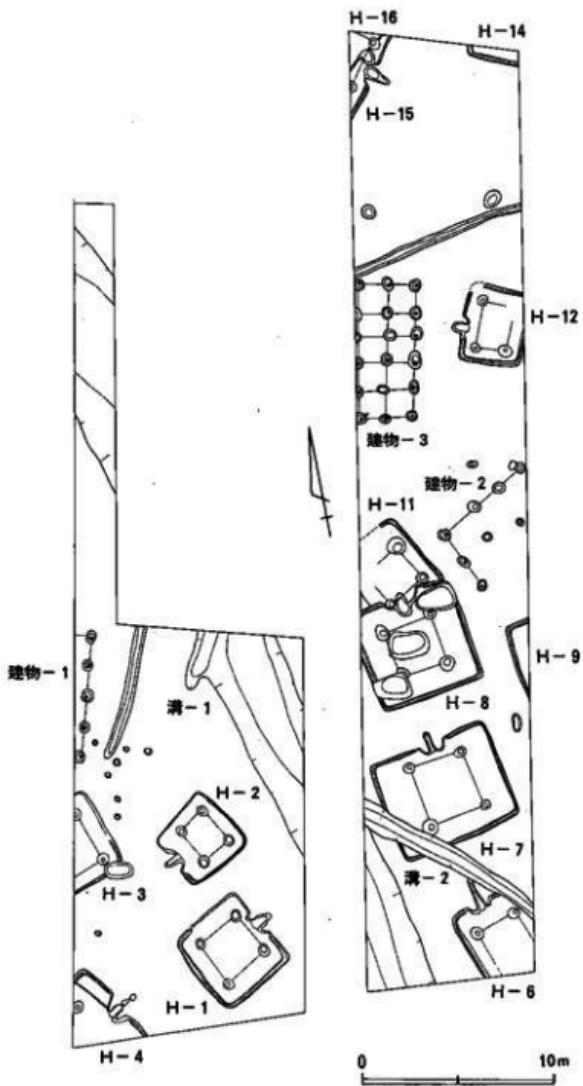
### 竪穴住居H-1（第39図）

H-1は調査区南端に位置している。住居址の平面形は1辺4m前後の方形で残存する壁高は約30cmである。

柱は4本で構成され、柱間距離は2.2m～2.4mを測り、深さは40cm～50cmである。

カマドは北東壁のほぼ中央に位置し袖部は淡黄褐色の粘質土が用いられている。底部には炭が薄く残り、立ち上り部が若干、被熱赤化している他は特に被熱痕はなく、煙道も短かい。

床面は中央付近はよくしまり、一部に黄褐色土による貼り床が認められるが全体的に軟弱で



第38図 A区古墳時代遺構配置図 (S=1/300)

ある。

住居址の埋土は暗灰褐色の砂質土であり、基盤土との識別は容易であった。遺物はまったく出土しないため正確な時期は不明であるが、6世紀の後半の遺物が隣接する溝-1から出土していることからほぼ同時期と考えられる。

#### 竪穴住居H-2（第40図）

H-2はH-1の北側に位置し、カマドの方向は逆であるが主軸は平行している。平面形は3.8m～3.4m四方のややいびつな方形を呈し、壁高の残存はわずかで10cm未満である。柱は深さ40cm～50cmの4本で構成され、柱間距離は1.8m～2mである。

カマドは南西壁の中央に位置している。残存状況があまりよくないため炭と若干の被熱赤化が看取できる程度である。

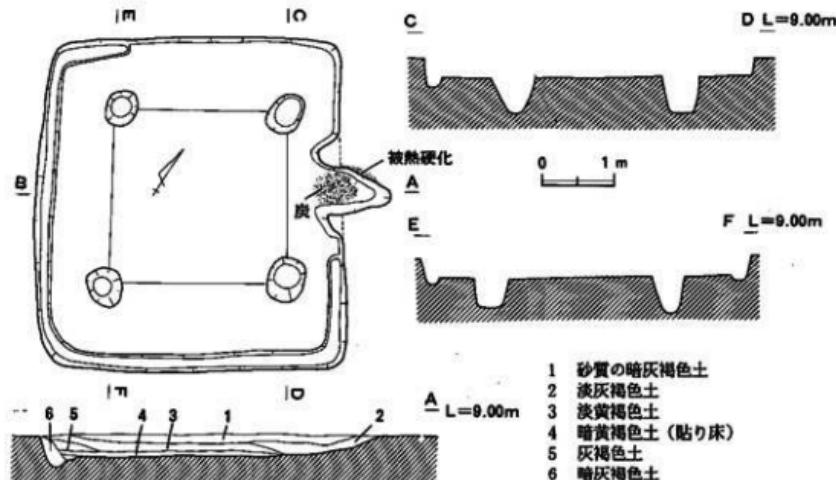
床面には淡黄褐色の貼り床がみられ、比較的よく綺まっている。

住居址の埋土は暗黄灰褐色土で若干炭を含む。

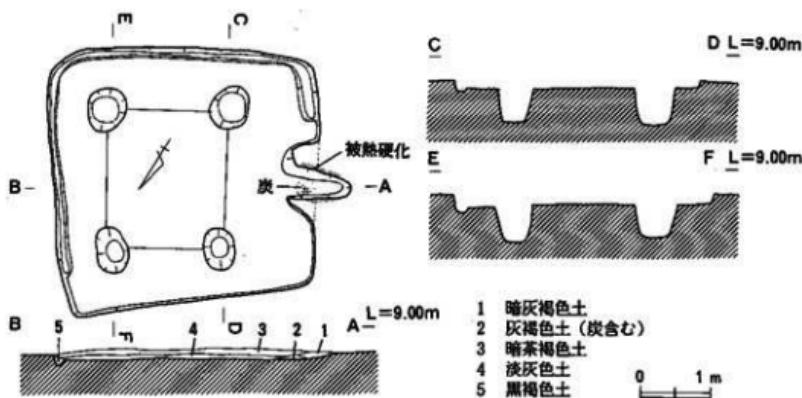
時期としては床面上から出土した須恵器の小片から6世紀の後半と考えられる。

#### 竪穴住居H-3（第41図）

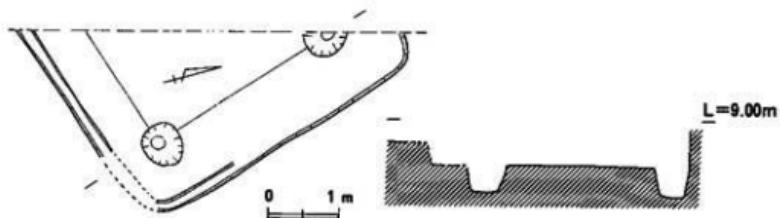
H-3は調査区西端に位置し、3分の2が調査区外にかかるため住居址の平面形は方形であろうと推定するしかない。H-3は弥生住居H-5に重複するため検出時にはあまり明瞭ではなく、埋土は淡黄色の砂質土であった。



第39図 H-4 平断面図 (S=1/80)



第40図 H-2 平断面図 (S=180)



第41図 H-3 平断面図 (S=1/80)

柱は2本が確認でき、深さ40cm、柱間2.8mを測る。

床面には貼り床は認められず若干の炭が散布していた。

出土遺物はないが、他の住居同様、6世紀の後半と思われる。

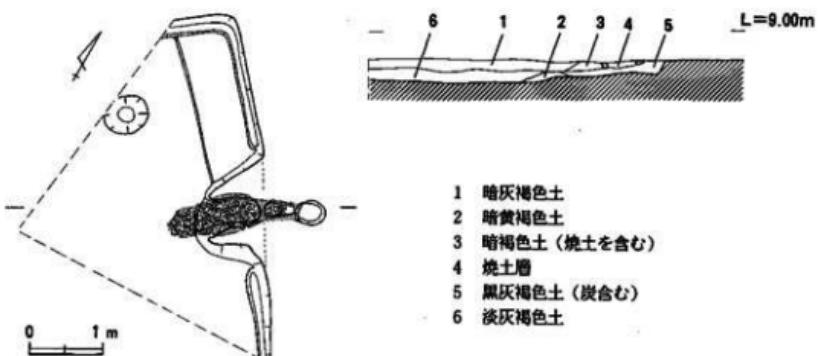
#### 竪穴住居H-4（第42図）

H-4は調査区の南西隅に位置する。大半は調査区外にかかり、カマドと柱が1本確認できた。

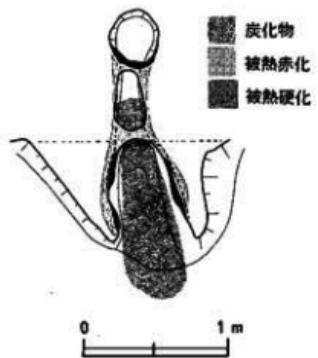
カマドは黄褐色の粘土により構築されているが、焚き口付近と煙道の天井が一部崩落しているのみで他はほぼ完存していた。煙道は更に立ち上っていたと考えられるがリング状に被熱赤化している。底面には炭と焼土粒が散布し、炭中より骨片が出土した。

H-4が掘り込まれた基盤土は明黄色の粘質土層で、他の住居のような砂質土ではないため床面もよく綺まっていた。

カマドの左手には高さ約10cmのベッド状の部分があり、手捏ねのミニチュア土器が完形で出



第42図 H-4 平断面図 ( $S=1/80$ )



第43図 H-4 カマド平面図 ( $S=1/40$ )

土した。住居廃棄時の祭祀と考えられる。

柱穴は約60cmの深さで、直徑約15cmの柱痕跡が確認できた。

出土遺物は床面上より出土した須恵器の小片より6世紀の後半が考えられる。

#### 竪穴住居H-6（第44図）

H-6は調査区南端に位置し、南北3分の1が調査区外にかかり、溝-2にも一部切られている。

平面形は方形を呈すと思われるが、正確な数値は不明である。

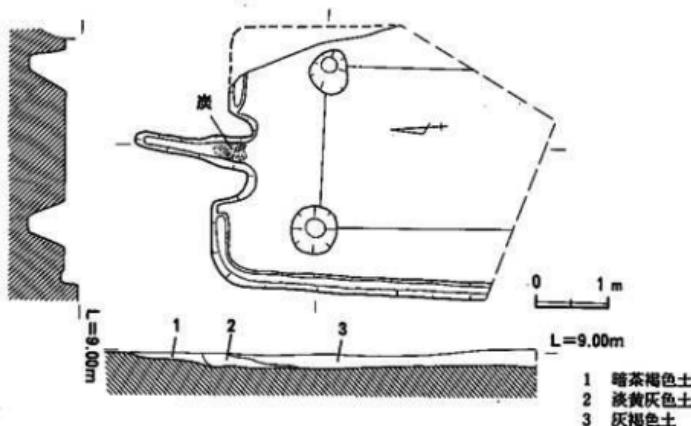
柱穴が2本が検出され、深さ約40cm、柱間は1.7mを測る。

カマドは地壁中央に位置し、底面には若干の炭が残り細長い煙道が緩かに外に伸びる。

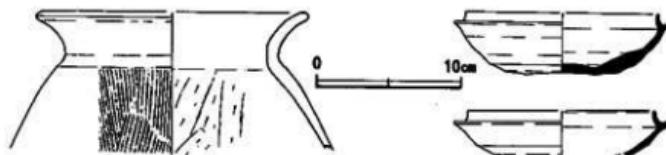
床面は貼り床は確認できず、カマド付近以外は軟弱である。

遺物はカマドの埋土中より土師器の壺が、また床面上からは須恵器の壺が出土した。これらの土器から時期としては6世紀の後半が考えられる。

#### 竪穴住居H-7（第46図）

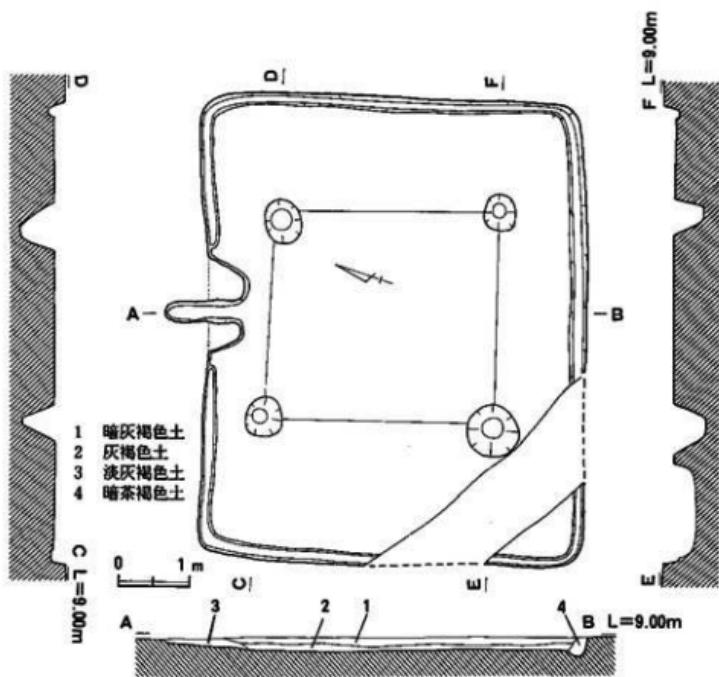


第44図 H-6 平断面図 ( $S=1/80$ )



第45図 H-6 出土遺物 ( $S=1/4$ )

H-7は調査区中程東寄りに位置する。その主軸はほぼ溝-1に平行するかのようである。  
南西端で溝-2に切られ、壁もかなり削平を受けていたため残存状況は良好ではない。  
平面形は6.5m×5.5mの方形を呈し、残存する壁高は約20cmである。  
柱は四本で構成され深さ50cm、柱間3mを測る。  
カマドは北壁中央に位置するが基底部が残るのみのため炭が若干残る程度であるが、袖部が  
黄褐色の粘質土で築かれていることは確認できた。  
床面には貼り床が若干見られるが、砂質土の基盤層がよく踏み固められている。  
遺物はほとんど出土していないが、他の住居と同一の時期と考えられる。  
竪穴住居H-8（第47図）  
H-8はH-7の北に位置し、同様にその主軸は溝-1に平行している。



第46図 H-7 平断面図 ( $S=1/80$ )

平面形は5.5m四方の方形であるが削平が激しいためと土壤に切られているため残存状況は良好ではない。

柱は4本で深さ60cm、柱間2.4m～2.6mを測る。

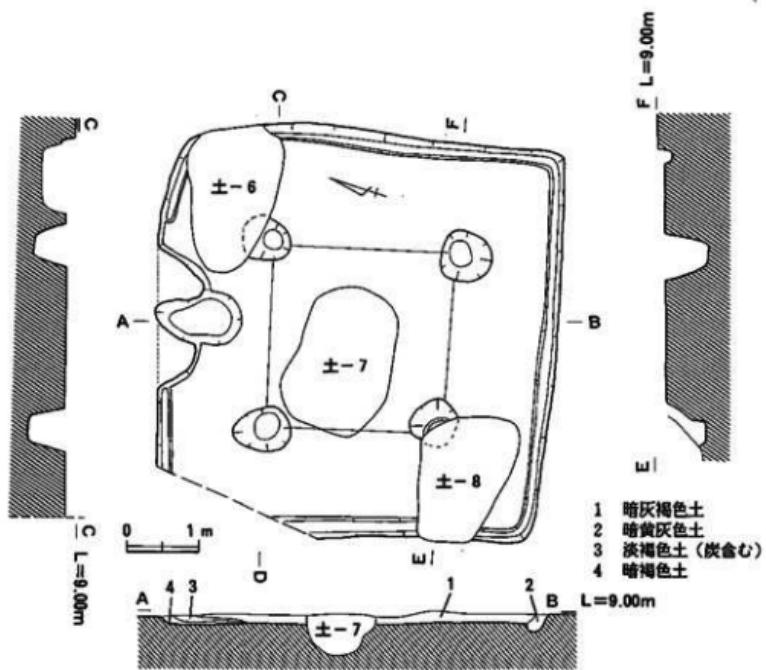
カマドは北壁中央に位置し、袖部はやはり黄褐色の粘質土である。燃焼部底面は若干、窪み炭が堆積している。

床面には貼り床は見られないが、よく締まっている。また、住居址を切る3基の土壤は埋土から切り込まれているが、住居の平面形の中に収まるように掘られている。このことから、住居が埋没し始めた段階でまだ輪郭が窪んだ状態時に掘り込まれたと思われる。

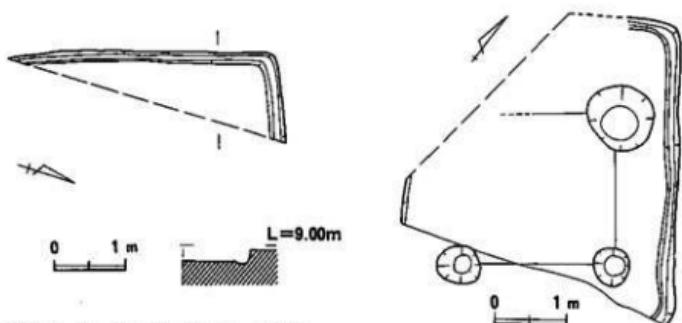
H-8の時期としては出土した須恵器の小片より、6世紀の後半と考えられる。

#### 竪穴住居H-9（第48図）

H-9はH-8の東隣に位置し、大半が調査区外の現道下に入っている。そのため確認できたのは北西壁の隅である。埋土は暗褐色を呈し遺物は皆無であった。



第47図 H-8 平断面図 ( $S = 1/80$ )



第48図 H-9 平断面図 ( $S = 1/80$ )



時期としては位置と方向からH-7・8と同時期と思われる。

#### 竪穴住居H-11(第49図)

H-11はH-8の北に位置するが、北壁は擾乱により、また南壁はH-8に切られるため全体の正確な規模は不明である。残存する東壁から推定すると約4m四方の方形を呈すると思われる。壁高は約10cmが残り、埋土は暗灰褐色土であった。柱は3本が確認できたが深さ約50cm、柱間2.2mを測る。

カマドの位置は不明であるが北壁か南壁のいずれかであろう。

時期としては出土した須恵器の小片から6世紀後半と考えられる。

#### 竪穴住居H-12(第50図)

H-12は調査区北東寄りに位置するが、比較的、周辺に住居址が存在していない地点である。

平面形は3m×4mの方形を呈し西壁にカマドが付く。住居址が掘り込まれた基盤土は非常にもろい砂質土のため遺構の残存状況は良くなかった。

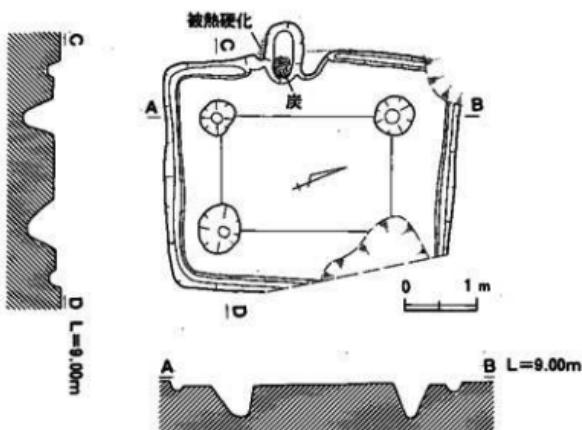
主柱穴は3本が確認できたが、深さ45cm、柱間2.4m～1.6mを測る。

残存する壁高が10cm弱のためカマドも基底部がかろうじて残存するのみで若干、炭、焼土が残っていた。床面には貼り床は見られず軟弱であった。

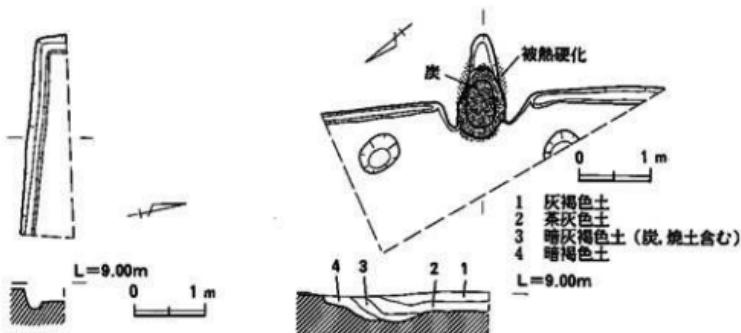
時期としては、須恵器の小片から6世紀後半と考えられる。

#### 竪穴住居H-14(第51図)

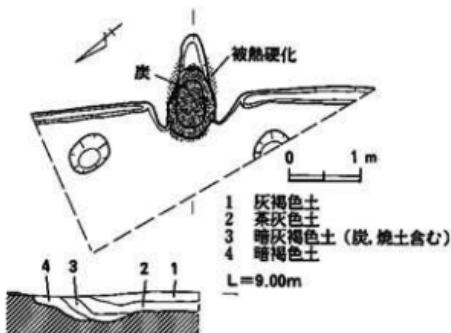
H-14は調査区北端に位置し、大半は調査区外である。平面形は方形と推定できるものの規



第50図 H-12平面面図(S=1/80)



第51図 H-14平面断面図 (S=1/80)



第52図 H-15平面断面図 (S=1/80)

模等は不明である。埋土は暗灰褐色で遺物はまったく出土しなかった。

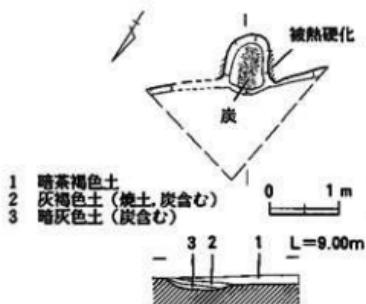
#### 竪穴住居 H-15 (第52図)

H-15は調査区北西端に位置し、大半は調査区外であるが、柱穴2本とカマドが確認できた。カマドの残存が良好で燃焼部には炭と焼土が残存し小骨片が出土した。またカマドの右壁際で須恵器の壺の底部が立った状態で出土した。

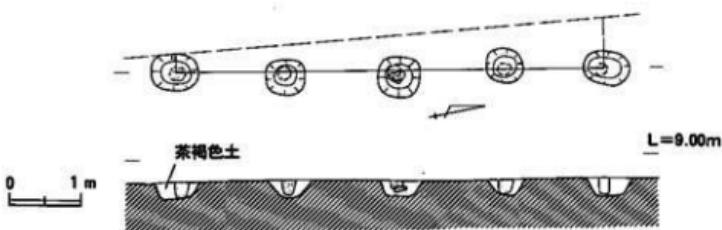
時期としては須恵器から6世紀後半と考えられる。

#### 竪穴住居 H-16 (第53図)

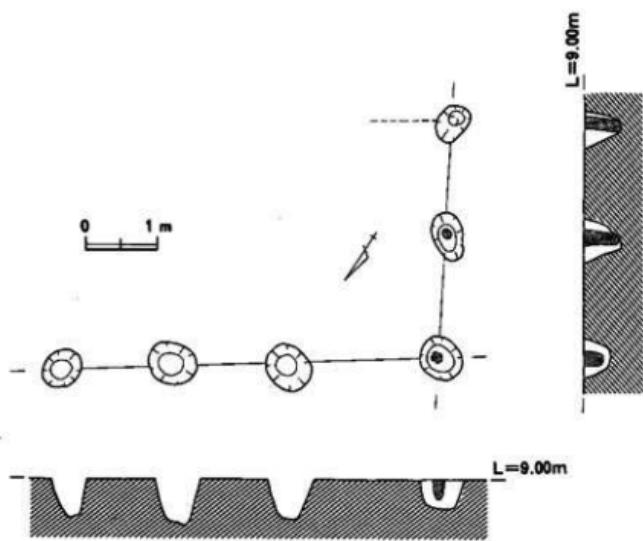
H-16はH-15の床面下で確認できた。かなり削平されているためカマドしか検出できなかった。



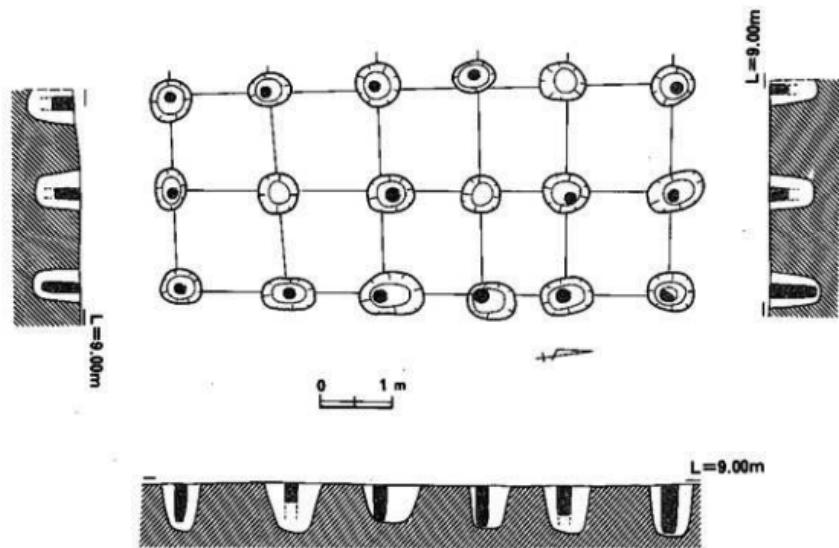
第53図 H-16平面断面図 (S=1/80)



第54図 建物-1平面断面図 (S=1/80)



第55図 建物-2 平断面図 ( $S=1/80$ )



第56図 建物-3 平断面図 ( $S=1/80$ )

遺物は出土しなかったため時期は不明であるが、H-15より若干、古い時期であろう。

#### 掘立柱建物-1（第54図）

建物-1は調査区西端に位置し、5個の柱穴が検出されたが大半は調査区外と思われる。

柱間は1.5m等間を測る。柱穴は直径50cm～60cmの円形で太さ約20cmの柱痕が観察できた。

残存する深さは20cm強であるが、敷石のみられる柱穴もある。柱穴の埋土は暗褐色土でよくしまっている。埋土から判断して建物-1の時期は古墳時代と考えられる。

#### 掘立柱建物-2（第55図）

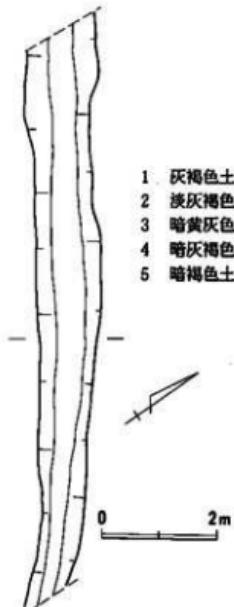
建物-2は調査区中程東端に所在する。6個の柱穴が確認されたが、地下水水界に伴う基盤土のグライ化のため正確な規模は不明である。

柱穴は深さ40cm～60cmで円形を呈している。柱痕の残るものもあり埋土は暗灰褐色土である。遺物が出土しないため時期は不明であったが、周辺の住居と同時期であると考えられる。

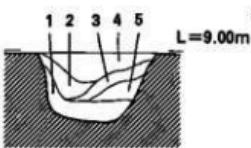
#### 掘立柱建物-3（第56図）

建物-3は調査区中程に位置し、一部調査区外にかかると思われるため正確な規模は不明であるが現状では2×5の縦柱の建物である。柱間は、1.2m～1.4mで深さは50cm～60cmを測るが、湧水が激しく完掘できない柱もあった。

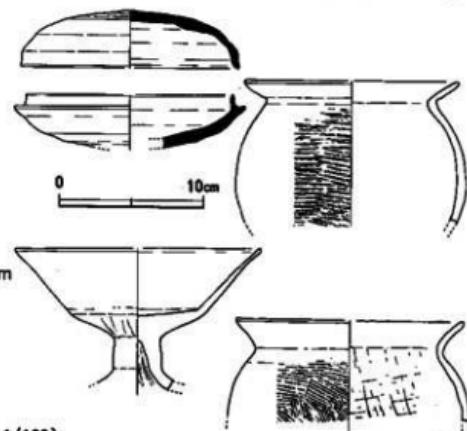
柱痕の観察できるものはすべてではないが底部には灰色粘土がたまっているが恐らく自然現象と考えられる。



- 1 灰褐色土
- 2 淡灰褐色土
- 3 暗黄灰色土
- 4 暗灰褐色土
- 5 暗褐色土



第57図 溝-2 平断面図 (S=1/50, 1/100)



第58図 溝-2 出土遺物 (S=1/4)

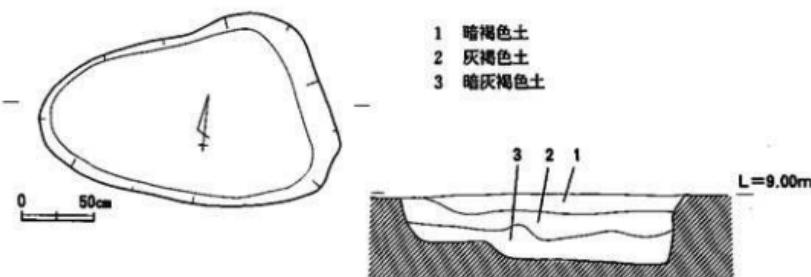
時期は柱痕より出土した須恵器の小片から6世紀後半と考えられる。

#### 溝-2(第57図)

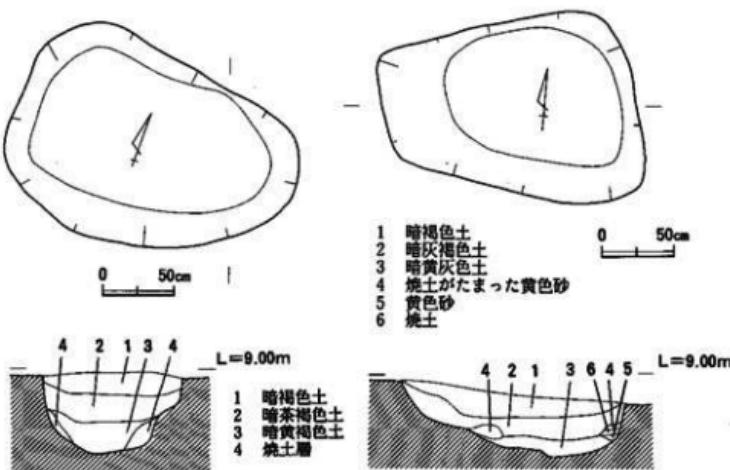
溝-2はH-6・7を切って溝-1から分流している。深さは50cm~60cmで底面は舟底状である。時期としては溝-1の上層と同じと考え6世紀後半としたい。

#### 土壤6・7・8(第59・60・61図)

これら3基の土壤はいずれもH-8の埋土に掘り込まれている。平面形は不整形で深さは40cm~50cmである。底面は平坦気味で埋土は炭を多く含み一部被熱痕のある部分もある。遺物は須恵器の破片などであるが、土壤の性格が不明なため時期も述断しかねる。ただ前記のように



第59図 土壌-6 平断面図 (S=1/40)



第60図 土壌-7 平断面図 (S=1/40)

第61図 土壌-8 平断面図 (S=1/40)

H-8がまだ完全に埋没していない段階で掘り込まれたことは確実であり、さほど離れた時期ではないと思われる。

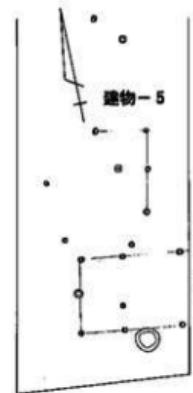
### 3. 中世の遺構・遺物

A区に於ける中世の遺構としては柱穴と土壙などを検出した。これらは調査区の東端南寄りに多くがたまっており、その覆土は中世遺構によくみられる淡灰色土である。

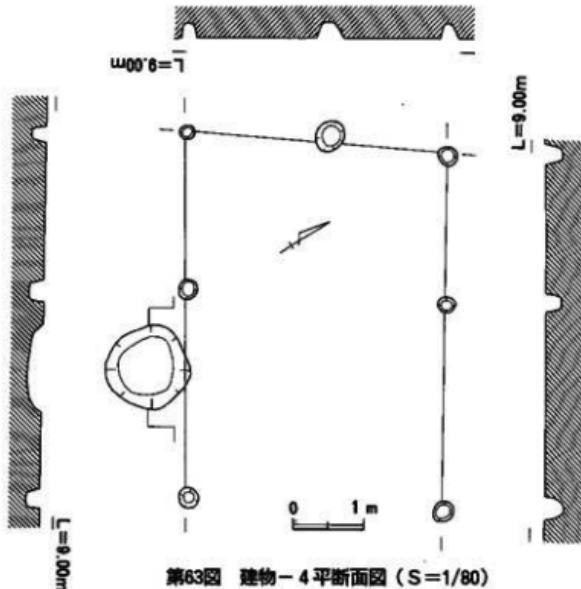
#### 建物-4（第63図）

建物-4は3分の1が調査区外にかかると思われるが柱穴7本を検出した。規模は架間2間で3.8m、桁行は推定で3間で約8mと思われる。

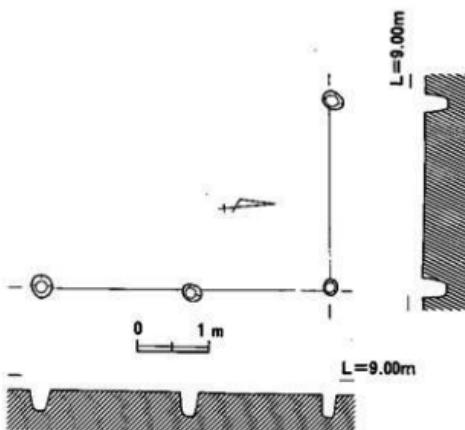
柱穴は直径20~30cm、深さ約30cmを測る。桁行に接する、おそらく軒下と思われる位置に土壙を検出した。土壙の規模は深さ約30cm前後、直径約1mで土師器の碗2コと小皿5枚が出土した。土器はすべて完形で、小皿が重ねられた状態であった。この土壙はその位置や、出土状態から建物に伴う祭祀の可能性を考えられる。



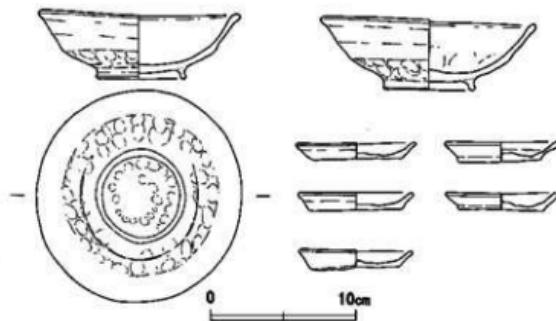
第62図 中世遺構配置図  
(S=1/300)



第63図 建物-4 平断面図 (S=1/80)



第64図 建物 - 5 平断面図 ( $S=1/80$ )



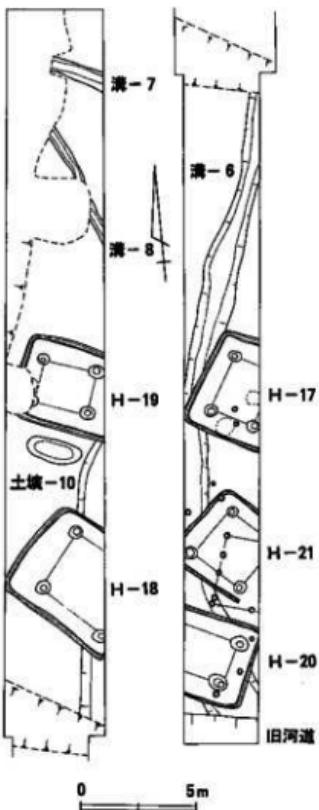
第65図 建物 - 4 土壌出土遺物 ( $S=1/4$ )

#### 建物 - 5 (第64図)

建物 - 5 は 4 の北隣に並列するかのように検出された。建物の規模は不明であるが、直径20～30cm、深さ30cmの柱穴4本が確認できた。

他にも同様の柱穴を検出したが、建物となるものはなかった。

以上の建物と柱穴の時期は、土壌の他に遺物がないため明確ではないが、土師器碗から12世紀後半と考えてよいと思われる。



第66図 B区遺構配置図 ( $S=1/300$ )

## 第2節 B区の調査概要

B区は道路拡幅に伴う側溝の部分で幅5m～4mで長さ73mを調査した。

調査区の幅が狭いため住居址などが一軒全体を調査できた例はなく、断片的な調査にとどまることとなった。

基盤土はA区とは違い、よく締った粘質の淡黄灰色土で、南に徐々に下降する。この調査区南端の旧河道が今回調査した畠田遺跡の地形的な南限と考えられる。

遺構検出面は現状水田の耕作土と鋤床層を約30cm除去するとすぐに現われる。

### 1. 弥生時代の遺構・遺物

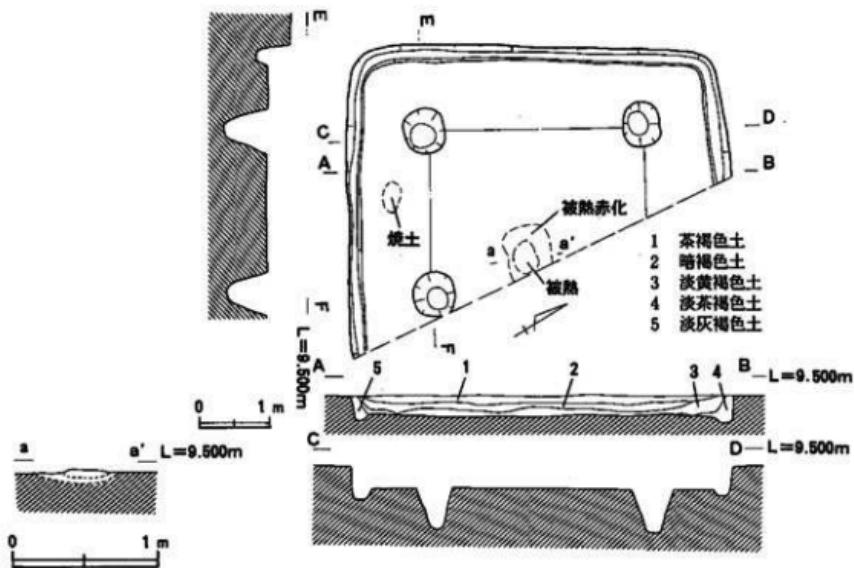
弥生時代の遺構としては溝-6のみである。溝は深さ20～30cmで幅を変えながら調査区を南北に流れている。埋土は基盤土に近い砂質土で、土器片が少量と分銅形土製品が出土した。時期としては弥生時代中期と思われる。

### 2. 古墳時代の遺構・遺物

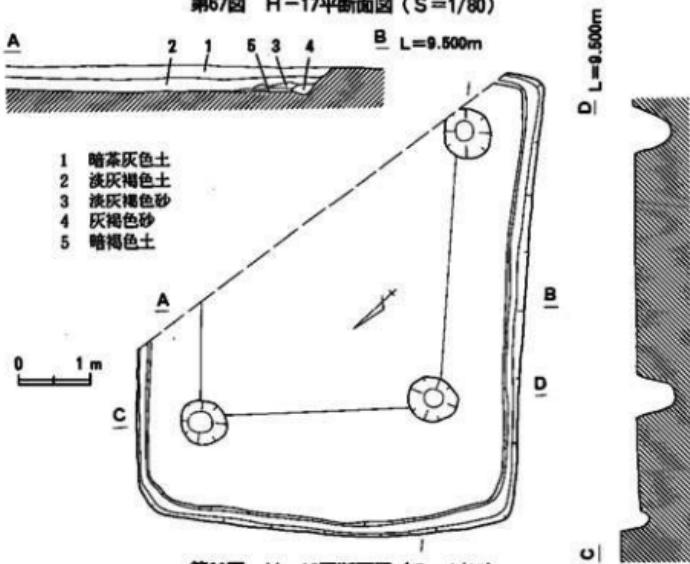
古墳時代の遺構は竪穴住居址5軒、溝2条を調査した。

#### 竪穴住居H-17(第67図)

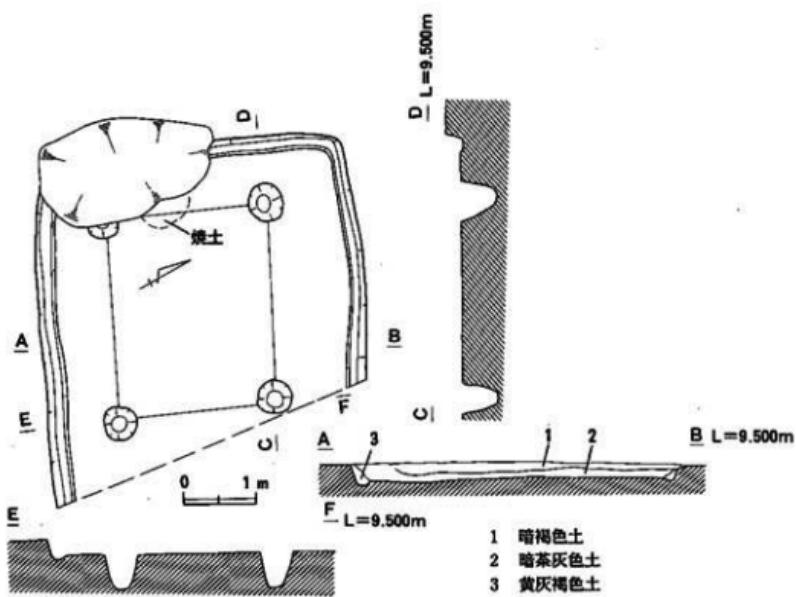
H-17は調査区中程に位置し3分の1が調査区外にかかり、この辺にカマドが存在すると思われる。規模は不明であるが一片約5mの方形と推定できる。柱穴は深さ60cm前後のものが3本確認できた。柱に囲まれた中央部には被熱で赤色に硬化して若干盛り上がった部分が検出された。他の例から屋内鍛冶炉であった可能性が高い。また南壁際に焼土が若干散って検出されたが床面上に被熱痕跡はない。住居址の時期としては床面上から出土した須恵器片から6世紀後半が考えられる。



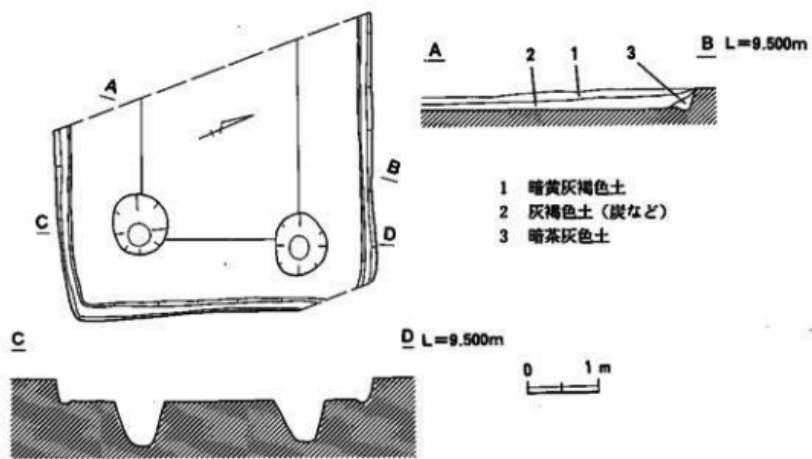
第67図 H-17平断面図 ( $S=1/80$ )



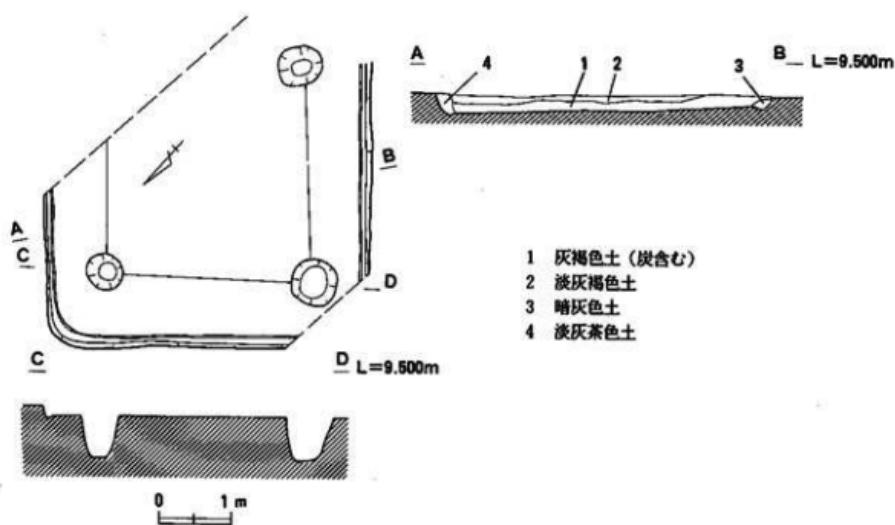
第68図 H-18平断面図 ( $S=1/80$ )



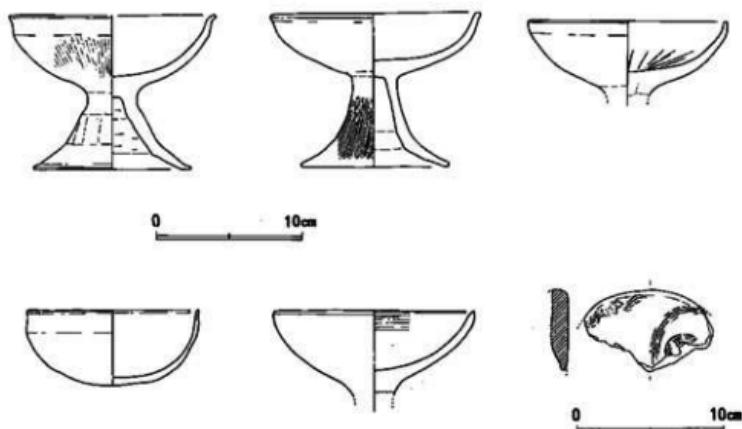
第69図 H-19平断面図 ( $S=1/80$ )



第70図 H-20平断面図 ( $S=1/80$ )



第71図 H-21平断面図 ( $S=1/80$ )



第72図 H-21. 漢出土遺物 ( $S=1/4, 1/2$ )

#### 豊穴住居H-18（第68図）

H-18はカマドと推定される辺が調査区外にかかるため正確な規模は不明であるが $5\text{m} \times 6\text{m}$ の方形の住居と推定できる。柱は深さ60cm前後のものが3本残存している。時期としては、出土した須恵器の小片や埋土から6世紀の後半と考えられる。

#### 豊穴住居H-19（第69図）

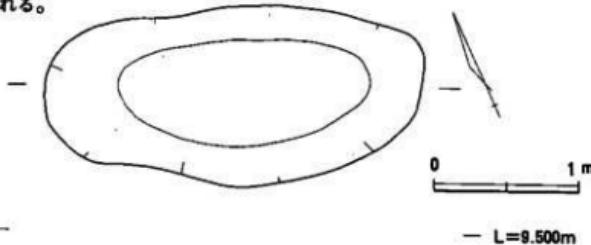
H-19はカマドと推定される部分を搅乱に切られているため床面上に焼土が散布している。正確な規模は不明であるが、 $4\text{m} \times 5\text{m}$ の方形を呈す住居と思われる。柱穴は60cm前後の深さものが4本確認されている。出土遺物がないため時期は不明であるが、他の住居と同じ6世紀後半の所産と考えて差しつかえあるまい。

#### 豊穴住居H-20・21（第70・71図）

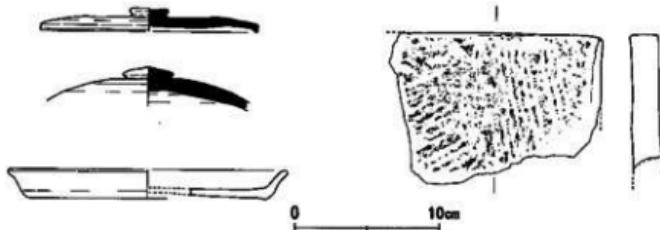
H-20と21は調査区南端に並列して位置している。いずれも半分が調査区外のため正確な規模は不明であるが、カマドが付く方形の住居と思われる。出土遺物がないため時期は不明であるが、埋土などからみて前記の住居址と同時期であろう。

#### 溝-7・8

いざれも調査区北端を北西から南東に走る。埋土は暗褐色土で、若干、須恵器を含むため古墳時代と考えられる。



第73図 土壌-10平断面図 ( $S=1/40$ )



第74図 土壌-10出土遺物 ( $S=1/4$ )

### 3. 古代・中世の遺構・遺物

B区では奈良時代の土壙1基、中世の建物1棟、を検出した。

土壙は約1.5mの梢円形を呈し深さは約20cmで緩やかな床面である。須恵器、丹塗り土師器、布目瓦が出土した。(第74図)

建物は正確な規模は不明であるが柱穴4本を確認した。柱穴は約30cmの深さで淡灰色の埋土であった。時期としては出土した土師器挽の小片から12世紀後半と思われる。

## 第3節 まとめにかえて

今回の調査では主に古墳時代後期の集落の様相が断片的ではあるが明らかになった。このことを中心に2・3の問題点について考察を加えまとめてかえたい。

まず集落の出現と構成についてであるが、今回A区で明らかになったカマドを付設した住居址は中央を流れる溝-1をはさんで明らかに同時期の集落と言える配置を示している。溝の西側は均等な間隔でカマドの方向を違えている。溝の東側は同一方向のカマドで等間隔である。また、竪穴住居のない広場的な地点には掘立柱建物(倉庫か?)が配置されているなどきわめて計画的な整然とした集落と言えよう。

これらの住居の時期は出土した土器片からほぼ6世紀後半である。多少、重複したり先行するものもあるが、ほぼ同時に存在したと考えて差しつかえあるまい。

一方、今まで市内で調査された古墳時代の住居址はかなりの数にのぼるが、やはり6世紀中頃から後半にかけての調査例が多く、急速に集落の数が増加したことが明らかである。

また古墳時代後期に爆発的に群集墳が築造されることや、平野に接する丘陵部で鉄鉱石を使用した鉄生産もやはり6世紀後半以降急速に伸展することも事実である。

今日調査した畠田遺跡に近接する緑山古墳群もやはり6世紀中頃から後半に築造されたものであり、集落の計画的な設営にかなり深い関係があるものと思われる。

今回の調査を含めて、今まで判明している事実のみで総社平野に於ける古墳時代後期の集落、墳墓、生産基盤が明確に関連づけられる訳ではないが、各々の伸展が古代吉備国を支え、その活動の証明であったことは疑いないであろう。

最後に、今回も含めてカマドの炭中に骨片を確認できた例は筆者の知見だけで岡山市内、総社市内に20例を越える。これは、住居を廃棄するにあたって行われた祭祀の可能性が高く、住居内の土器が清掃されていることや、ミニチュア土器を意図的に置き去ることも他に例があり、合わせて注目できよう。今後の類例の増加に期待したい。



1. 三須・畠田遺跡調査前（南から）



2. H-5（西から）

第18図版



1. H-13 (西から)



2. H-10 (東から)



1. H-1 (南から)



2. H-4 (西から)

第20図版



1. 岩田遺跡 A区調査区全景



2. H-3 (南から)

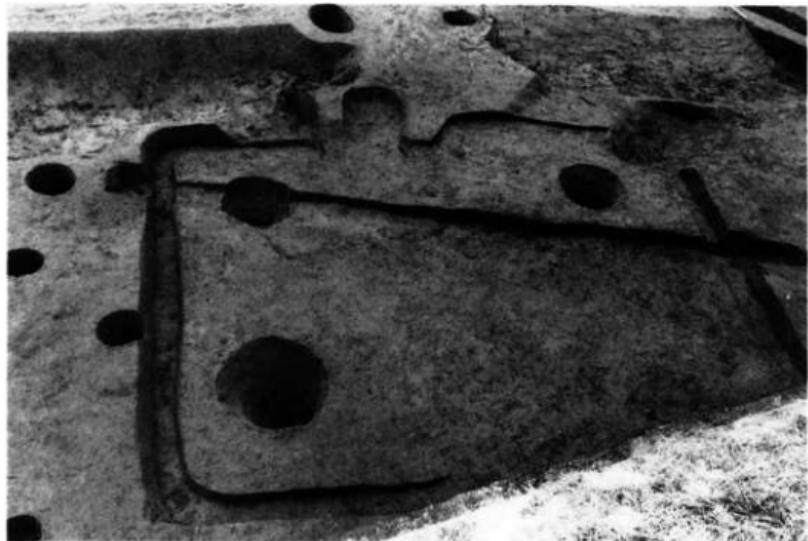


1. H-7 (南から)



2. H-8 (南から)

第22図版



1. H-12 (南から)



2. H-17 (南から)



1. H-20 (北から)



2. H-18 (北から)

## 総社市埋蔵文化財調査年報 2

1993年3月 印刷  
1993年3月 発行

編集発行 総社市教育委員会  
総社市中央一丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社  
総社市総社一丁目10番24号

